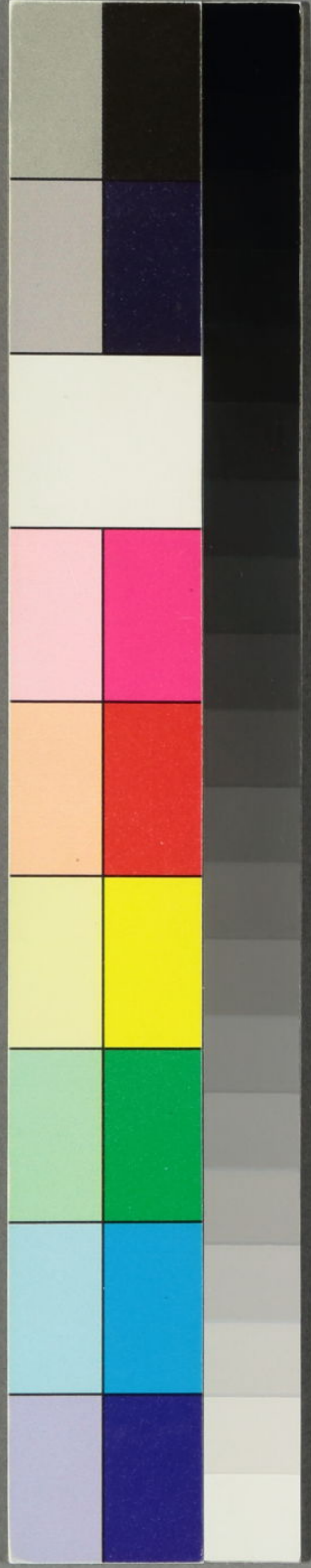


華實年浪草

春之部  
卷之一



手記の序

此の徳半書の上巻に入る

行吏の繁下國等の二年中を以て

修り及一巻を以て終るべし

たりと云ふ事ありしか一巻を以

て一巻とすべし其向を以て及三

四時を以て終る品々世々の事



華嚴經

選りし季候より女携りて  
牛車行かせし事ありし  
をの志し小冊子なり  
大全ありしを又いふ  
并に選生の御宮体より朝教大夫  
将川く一三餘并兼文子官祿  
心と會らば一と世を金馬門

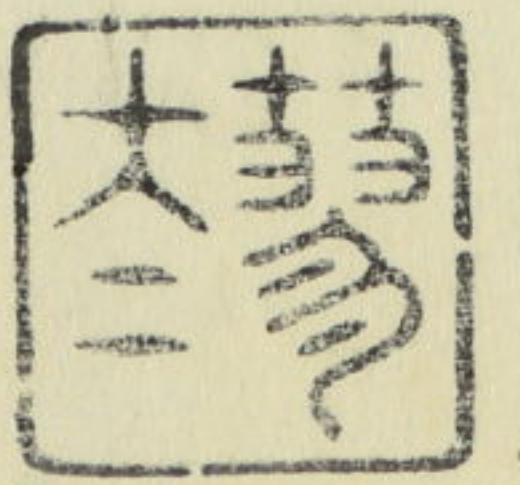
選りの志ありし事ありし  
さし中ありし事ありし  
臨むし知し事ありし  
まゝに多し事ありし  
根葉ふも博く當故も  
あまのく書きたり  
廿二年の終り

縁より申すは冊子全巻十二巻号と  
年浪三餘抄と云ふ事世に  
兼つたと云ふ事久しき所  
此と云ふ事一は是を需ふ事  
短方よりてかゝる綺縠の緒を解ふと  
拾遺集年浪を織ひて申す事  
志すべしと云ふ時より一は  
所

高橋赤松を採之申す事  
所

空麻平居士

蓼太



華實年浪草三餘抄自序



夫雪月花の四季第一の景物——とて乃  
 修波なして草木鳥獸小及魚り神祭佛事  
 公支格式をその類い小何れ存も日とて月に  
 が節月ゆて四季ふかふるうるとはゆふ月花とて  
 節物中の故よ入ぬとれと詩歌といひ連誹といふ  
 つまじういれとるを修と別よ攝ふ節記良材わ

汗ひの中にも俳諧を和歌連哥此印もあ  
 して志とも其詞倍語怪話と骨々風流  
 雅俗成肉や上を雲わ乃るや紙さかひ  
 下は後、物さの業ごとく象一森羅万象  
 みか途向く物季句や利柄おぢく常池小  
 寸じ懐をいふと文多と刷匙セツカ、扇アビ、鷓鴣シヤク  
 酒樽ニヤクも程分ニヤク響子ニヤクにむらよといつまゝ能造ニヤク

何と云ふか、その時季の品よきもの、牡丹と  
 髪と酒風紙杯とさるは、いふは、乃理りなれば  
 わる故、世は、先葉季節とて、書奉  
 うか、酒、次、紙、さ、か、た、讓、こ、ら、な  
 省、紙、い、ま、今、ま、の、事、か、予、不、敏、なり  
 六、一、と、其、願、を、存、と、程、か、を、紙、補、ん、と、か、ふ  
 り、久、く、仕、官、の、い、よ、め、か、た、あ、り、日、の、修、り、た

考一月の終りにある年終終りの記して一月  
 十二月、うち終りの上下を序とのわりと  
 とく十五卷俳諧三餘抄と名づく元より  
 終る纏書も紙汲よき六冊に兼て書きた  
 りし終り愚乃あるより根さし誤りの終り  
 又ある處は終るはあからんよき書きたり  
 わりし唯懐中の記書なりと終るに

私塾一書免とる系不終る終るはあからんよ  
 右破のつぎ屋中の板庇より月影のと免かして  
 一書終る終る人つわりと終る一日書林の書  
 屋をたがてせらたつ終るはあからんよ  
 終るはあからんよ福舟のいかも終るはあからんよ  
 終るはあからんよ書林と和漢の事實歳  
 時の風俗と終るはあからんよ終るはあからんよ

物を志と人きり、志を以て紙を以てしんやされ、  
 乃常人のる又紙乃用とて、紙を以てしんやされ、  
 華實年浪草とて、梓小縷、いん、ふ、予、  
 か、い、く、周人の腐鼠とて、璞とて楚客の  
 山雞を、何をゆりて、鳳皇とたり、い、る、識者の  
 二、い、つ、紙、免、ま、す、今、ゆ、い、る、る、紙、わ、さ、る、る、  
 書、紙、概、あ、り、乃、其、く、世、ま、は、い、つ、ん、ん、の、ま、い、と

拓くのみち、わ、る、い、ま、ら、い、辞、ま、い、い、と、い、か、う  
 ま、は、清、く、お、ち、に、懸、か、い、紙、う、り、く、後、の、人  
 る、の、紙、わ、り、い、ま、ら、い、紙、と、補、い、あ、り、い、か、う、  
 此、く、ま、り、を、是、か、い、ん

干時

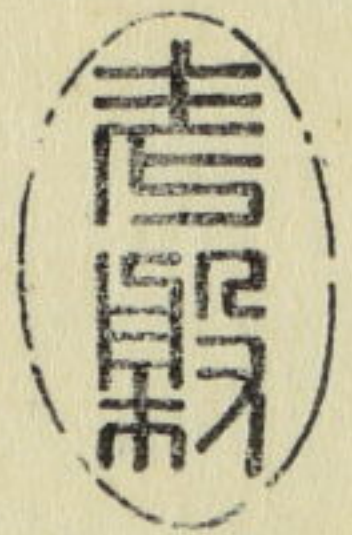
天明元年丑のく、穠月

油幕菴木雁子鹿文題





俳諧三餘抄序



心不可不較系曲禮三子蓋  
皆原于此君子無故琴今  
琴必不離身降此而後吹  
琴鼓瑟必彈絃較手以闕大

華夏書局

金序

一

走鷄六博蹋鞠何所不有  
唯至優游言詠置懷風  
月幽閑之趣何啻霄壤  
鷄君在

王府爵為朝散大夫不為

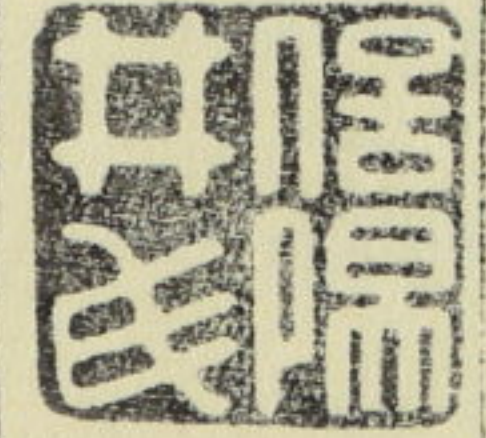
非仕優而無他嗜好獨喜  
為諧語之國風之數爰  
者如詩之有伊風子欵  
其著者是編博引旁搜無  
復所遺有助於斯技也

大矣因乞余題言余素  
不習之焉能赅貝一辭唯  
言相識之久知其所以繫  
心以為之序待之善戲  
諛之不為虐

鷄君有焉

安永辛丑春三月

金峨井純仰撰



天明二年壬寅仲春

東江源鮮書

東江  
居本

年浪草三餘抄回向文 訂

謹而この書小記一奉る取入神社佛閣乃  
活邪信はゆきしてまうはく我今此書冊を  
著いせやていせも童子の戯と指爪甲以  
もて佛像と画紙かまのふら乃は都ら狂言綺  
語乃娯戯なりも濕障とゆひに似る極と  
いとも凡世書小紙をせざるも春秋廿とせ

阿なりを要するといふは寝食の事なり  
その自己を迷ふは如くは如くは如くは如く  
は如くは如くは如くは如くは如くは如くは  
その元を跋鷲の如くは如くは如くは如くは  
微功とてを今に今に今に今に今に今に今に  
徳を以て仰ぐ福とては漸々積功徳及び文  
ひかりに哀慈納文とては天下泰平國土

安穩先考先妣の法界の貴賤盡等并此  
書たつた如く是れ亦本意の歎中意乃如くは  
如くは如くは如くは如くは如くは如くは  
師友一葉す張閱見の如くは如くは如くは  
かき如くは如くは如くは如くは如くは如くは  
義ト仰ぐ治生産業實相と遠寄せる如くは  
金言にしてん如かの白舎人忠行を結行と

以讚佛乘の經かゝ古の高僧乃得句先  
獻佛ニと乃多ニる喜ニ山ニあニるニふニものニ多ニりニ敬ニ白ニ  
干時

天明元辛丑臘月

三餘齋鹿文謹書



華實年浪草三餘抄卷之一上目錄

○春太皞 勾芒 蒼天 東君 青陽 韶光 正月  
陸月一丁 ○王春月 太簇二丁 ○立春 雨水 孟春  
陔月 夏正 太皞月 初空月 霞初月 初春月 早緑月  
年端月三丁 ○暮新月 元日 元朝 三朝 元三 三始  
三元 履端 四方 拜星 佛四丁 ○齒固 餅鏡五丁  
○供御藥 藥子 屠蘊 白散 度嶂散六丁 ○椒柏  
酒 椒酒 椒觴 朝賀 朝拜 葵賀 葵瑞 小朝拜  
七丁 ○元日節會 諸司奏 七曜御曆 氷槎 國柶 葵

國栖笛 腹赤奏 八丁 ○ 院拜禮 祇園削掛 十一丁 ○  
 歲德神 元方棚 毘沙門功德經 若夷 夷廻 大  
 黑舞 十二丁 ○ 春駒鳥追 十三丁 ○ 傀儡師猿曳  
 門神棚 門松立松飾 松飾竹 十四丁 ○ 飾繩  
 飾藁 注連飾 十五丁 ○ 飾炭 飾海老橙掛 麩  
 十六丁 ○ 若餅 雜煮祝 くと祝 十八丁 ○ いしけか  
 結昆布 大根 用牛蒡 用豆 大箸 蓬萊飾 喰積  
 十九丁 ○ 穗俵 榎 あのもれ 搗栗 串柳 柚栞  
 二十丁 ○ 栞子 橘 栞 齒 朶 穗長 裏白 廿一丁 ○ 昆

布 葩煎 熨斗 野老 梅干 廿二丁 ○ 俵子  
 田作 小殿原 押鮎 海羸身 螺肴 数子 廿三丁  
 ○ 葩煎賣 羊男 庭竈 福藁鋪 福藁 廿四丁  
 ○ 福沸 福鍋 毬打 ぶらり 廿五丁 ○ 羽子板 胡  
 鬼板 廿六丁 ○ 破魔弓 破魔矢 羊玉  
 廿七丁 ○ 宝引 福引 弓始 廿八丁 ○ 馬乘初 蔵用  
 廿九丁 ○ 湯殿始 飛馬始 著衣始 三十丁 ○ 船乘初  
 舟玉祭 三十一丁 ○ 幸木 幸籠 藁盒子 三物連歌  
 同俳諧 裏白連歌 同俳諧 三十二丁 ○ 御慶 去年

今年 君々春 千代春 物々々 新年 新玉年

若きまよひのま 初雞 三十三丁 ○初夢 初曆

曆用 三十四丁 ○試筆 試毫 吉書 書初 彈初

三十五丁 ○吹初 三十六丁 ○舞初 松囃 初 三十

七丁 ○初商 初賣 買初 店卸 帳閉 帳書 三十八

丁 ○歲旦用 節振舞 朝節 夕節 節小袖 松内

注連内 春かぐ 三十九丁 ○初芝居 千寿万歳 萬歳 四

十丁 ○御降 寢積 寐舉 水祝 早丁 ○懸想文賣

桃符 桃板 桃梗 仙木 神茶 鬱壘 畫雞帖 戸

葺索 如願 葭灰飛 春盤 生菜 四十二丁 ○採燕

戴春燕 初子日 子日遊 小松引 子日松 初子糸

の玉糸 四十三丁 ○初寅 四十四丁 ○番卸 初卯 卯杖

四十五丁 ○二宮大郷食 朝覲行幸 四十六丁 ○臨時客 五丁

包く 四十七丁 ○履新之慶 叙位 天狗宴 四十八丁 ○人日

靈辰 七日正月 人々帳ニ貼 初若菜 若菜 七種 齋

四十九丁 ○蕙菜摘 齋蒿摘 磯菜摘 五十二丁 ○白

馬節會 五十三丁 ○菜摘川神事 箕面富 五十四丁

○御齋會 五十五丁 ○真言院御修法 宿直人



華實抄卷之一上目錄終

大元師法 五十六丁

卷之一上目錄終

華實抄卷之一上

三餘齋庶文著

春

尚書曰物之動何以謂之春一也一物出也○漢書律曆志曰少陽者東方動也陽氣動物於時為春一蠢也物蠢生迺動運日行東陸謂之春○和訓義解云春ヲハルト訓スルハ晴ル、ト云義也冬ハ陰氣多ク春天ハ晴多シ○日本紀名云一説云ハワシクハ川カクテ去レタルクハ物生シテ有トリ又云張也原本レクハカクテ神紀云云

太皞

帝○禮月令註太皞伏羲木德之君勾芒少皞氏之子曰重木官之臣聖神繼天之極生有功德於民故後王於春祀之四時之帝與神皆此義下效之○漢書魏相曰東方之神太皞乘震執規司春

勾芒

神○月令

華實抄卷之一上

其帝大皞其神勾芒云高辛氏帝天  
下置五行之官木正曰勾芒為木神

蒼天 春為蒼天 〇秋名  
日气始發色蒼々

也 東君 郊祀志曰晉巫祠東君  
師古曰東君日神也

青陽 爾雅曰春為青  
陽 〇月令廣義

曰天地盛德 韶光 漢書律曆志曰景曰媚景韶景云韶光亦  
在木一色青 韶美也 春ノ景色ノ夕

ルハシキ  
ヲ云ナリ

正月 潛確類書鄭玄曰日月之行一歲十二會觀斗所建命  
其四時孟春者日月會於娵訾而斗建寅之辰云夏時

寅ヲ以テ正月トス是ヲ為人正商時也ヲ以テ正月トス是ヲ  
為地正周時子ヲ以テ正月トス是ヲ為天正夏商周三代ノ正

月別々ナリ天ハ子ニ開ケ地ハ巳ニ開ケ人ハ寅ニ生ス故ニ  
斗柄建此三辰之月皆可以為歲首今夏正ヲ用フルハ孔聖

モ顔子ニ夏ノ時ヲ行ヘト論語ニノ玉ヘリ 〇論語大全陳氏  
曰不曰一月而曰正月取王者居正之義 〇字彙曰元大也又善

之長也又首也始也人君立極改年不曰一年而曰元年每歲首  
月不曰一月而曰正月正月一日曰元日蓋欲人君體元以居正

也守一以止為正以一以元為元元高貌正字本音去声之盛音政  
至秦始皇諱政改為平声切音征後生至今沿之 〇五雜俎曰以

一月為正月自唐虞已然舜以正月受終於文祖云正月ヲ陸月  
ト云 〇世諺向答曰正月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月

とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月  
とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月

とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月  
とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月とむ月

義曰正長也此年之長月故稱正月長八頭一意一年一頭月也○琅邪代醉編叙代智度論云天帝親以宝鏡照四太州每月一移察人善惡此三月所謂正南瞻部州唐人以此不行死刑云本朝仁明天皇養和三年五月詔アリテ每年三長月於東寺灌頂院三七ノ比丘ヲ撰ヒ法ヲ修

### 王春月

尤傳曰春王正月周正月也○律曆

志曰春王月每月書王元之三統也三統

### 太簇

律○月令曰正月律

合一元○董仲舒傳曰春秋謂春謂王中太簇高誘曰簇一也言陰衰陽發萬物簇地而生○蔡邕月令章句曰律者率也声之管也上古聖人本陰陽別風声審清濁而不可以文載口傳也于是始鑄作鐘以主十二月之鐘難分別乃截竹為管謂之律一者清濁之率法也声之清濁以律長短為制

已下准之○淮南子曰一律而生五音十二律而為六十

### 立春

音因而六之六六三十六故三百六十音以當一歲之日節○月令廣義周天玉衡六向曰大寒後十五日斗柄指艮為立春正月節立始建也春无始至故為之立也○潛誓雜詔云正月朔日ヨリ前ニ立春アルヲ年内立春又ハ除日立春ナト云當年之立春去年アリテ來春ノ立春又正月ニアルノ時ハ中一年立春ナシ是ヲ倍ニ空穗年ト云或說一其年ノ矢ヲ中ニ貯フ故韜年ト云說侍ル覺來ナシ猶識者ニヨリテ決スヘシ云

### 雨水

中○月令廣義曰立春後十五日斗柄指寅為雨水正月中雨水中氣雪散為水也

### 孟春

元帝纂要

曰正月為孟春○周書曰凡四時成歲者春夏秋冬各有孟仲季以名十二月也

### 陬月

曆確類書曰正月為陬寅

位之月故曰孟陬亦曰孟陽離騷提授負于孟陬注  
太歲在寅曰攝提格正月為陬孟陬者孟春正月也  
夏正 月

廣義曰大禹以金德王都安邑國號夏  
仍有虞以建寅之月為歲首故謂夏正  
太即月 鷺水云人の  
子れ先せん

初空月 截玉雪の紙  
あつてな

霞初月 截玉けいもる山嵐しむらあまれ  
そのちんりやあをり月○定家

初春月 截玉あつ初春月の初日けり乃けき  
早緑月 秘截  
躬恒撰

年端月 莫傳抄あつるささるふりあ  
と月名とつてくつえ

暮新月 莫傳抄あつる月あせつるん初春の  
又あつるひあせは

元日 玉燭宝典曰正月一日為元日○書言故事曰正月朔日  
謂之元日○舜典曰正元日舜格于元祖○朱子曰元大

也始也乾元天德之大始故萬物資乾以始而有氣資坤以生而  
有形是等ノ説ヲ見ルニ唐虞ノ時既ニ元日ノ名アリ○事

文類聚曰正月上日朔日也夏以半明  
元朝三朝 尚書大傳  
曰正月一

為朔殷以雞鳴為朔周以夜半為朔  
元三 師古漢書注曰元三亦三朝同義也  
又元三者三元之轉称也云

三始 元日歲之始月之始日之始故  
三元 玉燭宝典曰元日  
者歲之元時之元

玉燭宝典曰元日

月之元也故曰三元元始也

### 履端

凡傳曰先王之正時也履端于始舉正於中歸餘於終

### 四方拜

元日寅一刻 主上出御清凉殿東庭拜四方○公事根源曰屬星也唱天地四方山陵也

年災或掃の家祚をわすれり云々 ○江次第日本紀曰皇極天皇元年八月朔天皇幸南河上跪拜四方祈雨云元且四方拜

事始見寛平二年御記云 季ハ江次第二見エタリ

### 星佛

滑誓雜記云當年星ノ九曜是ヲ歲初二祭ラニ為ニ其

星ノ形像ヲ彫テ禁裏院中へハ佛工所ヨリ調進シ是ヲ顯密ノ行者或陰陽家ニ仰テ星供ヲ行セ玉フ民間モ亦星ヲ祭ル此九曜ノ次第羅土水金日火計月木ト一歳ヨリ九歳ニテ至リ十歳ヨリ十八歳ト幾度モ九年目クニクリ返テ當年星ト

ナル也惣テ星宿ノ秘法ハ唐ノ開元中一行阿闍梨天文宿曜ノ術ニ通シ九曜曼多羅ヲ感得シ玉フト云凡ノ災難口舌アルハ羅計火ノ三ツノ惡星ヨリ起ル宜ク請僧如法供養シテ祀リ陀羅尼ヲ唱フヘシ消除一切災難陀羅尼經我有大吉祥真言名破病曜若能受持志心憶念其災自滅憂禍為福云

### 齒固

### 餅鏡

江次第曰元日平旦天皇

御東廂自御厨子所供御臺二本内膳自右青瑠門供御齒固具畧齒人年齡云也齒固者延年固齡之義也○礼記文王世子曰齒亦齡也注曰齡字以齒異名也故之言○大戴礼曰男八月生齒八歲而齒齒是人壽之教也○廿該向答曰くくくくをちの後いひふるいふるをちを人々を齒とて今も齒の字はいひふるいひふる齒固といふとくくくくをちの火四のちをいふとくくくく○

荆楚歲時記曰元日食膠牙餠取膠固之義餅削鏡形又○張天  
如對類大全曰餅字下麥米粉細注曰做成狀如鏡入於爐內烘熟蓋始于  
戰國云唐土進膠牙餠ト云膠牙ハ膠字ニカハ氏又カクム氏  
訓スホキバ也餠アメ也餠ヲ食シテ牙ヲ固ルノ意本朝齒固  
相似タリ○本朝食鑑云本邦自古以餅為神明之供而作大山  
塊ハ擬鏡形故呼餅稱鏡此擬ハ咫鏡字正月朔旦必以鏡餅供  
于諸神及一家長幼團樂同薦鏡餅以賀新歲凡用鏡餅祝賀儀  
以二箇相重號一重此諱奇用偶者字○棠花抄云（マクムホ  
もちのこゝろ）ハクハクセムカクキカハヨクキラスエ一臺モ十井大根  
橋ヲモルキを江の火キリノ條と用ゐるやけの後の終とがムルナリ  
後於予（マクムホ）ハクハクセムカクキカハヨクキラスエ一臺モ十井大根  
我々のマクムホもちのこゝろハクハクセムカクキカハヨクキラスエ一臺モ十井大根

河海抄曰齒固ノ具ニ大根ヲ用ル事アリ其故ニヤ一名ヲカ  
ガミ草ト云○岷江入楚齒固具 一本 煮塩 鮑 鮑 鮑 押鮑火下  
皆上置鮑串是 一本 鯉 烏 麻 猪 皆隨盛物串是置上俣  
貫之 一本 瓜 漬 茄 漬 蕪 大根 一本 屠蘇 白散  
窪杯 空盞 一本 酒盞 窪杯四口 一本 鏡 相具鮑  
大根橋 齒固ハクハクセムカクキカハヨクキラスエ一臺モ十井大根  
供御藥 藥子 屠蘇 白散 度嶂散  
江次第曰  
供御藥  
弘仁年 元日平旦天皇御東廂著御生氣方侍  
直衣具引苑陪膳女房以下著座藥  
子入自鬼間候尚藥南座采女二人御藥女官頭一人女  
官六人候於右青  
璅門内御厨子所供御臺二本得選於鬼間御陳子付女藏人女  
藏人執之來授陪膳内膳自右青璅門供齒固具次供一獻屠蘇

洗煖御酒主殿寮設火炉以御藥入於酒名之屠蕪盛別器宮內輔典藥頭侍醫等三人一一進膝突掌之依位階皆用別杯次供御酒盞次供御料酒此間內膳官人以大土杯三枚小土器三枚與藥女官女官前分令掌藥子本方自小兒起次盛御酒盞自御几帳綻付於藥頭藥頭傳陪膳主上入自夜御殿面戶當塗篋東方戶立給陪膳女房取御酒盞入御酒通自東廂御障子參御前供之次召後取次女官移入御酒盞餘分御鉚子餘分等於大土器傳給於後取人飲畢次供二獻神明白散也次供銀匙居馬頭盤入神明白散於金銅小器居中盤尚藥鋤藥入御酒盞次供御畢後女官以匙三度入白散於大土器次飲分給後取次供三獻度嶂散其儀與二獻同記略○公事根源曰五十二代嵯峨天皇弘仁年小りりり一人乞とりわんん一家小病か一家と乞と修ねと一星は病りとりとりとりとり

功修ゆとい多のくいをりとい云く○紀事云古屠蕪之屠忌死尸之尸加一点作尸是本朝之故實也藥子江次第奉仰之人求童女未嫁之者屠蕪酒廣韻元日飲之可除瘟氣屠者屠絕鬼氣蕪者蕪醒人魂倍說屠蕪草菴之名昔有人居草菴中每歲除夜遺回里菜一劑令井中浸之至元日取水置於樽合家飲之不病瘟疫孫思邈有屠蕪酒方蓋取菴名以名酒後人遂以屠蕪為酒名矣○時鏡新書曰元日飲屠蕪酒先從小者起或有向董勳者答曰倍以小者得歲故賀之○江次第曰御酒訓三寸者飲酒則邪氣去皮膚三寸云○秋名云酒ささる之風を吹亂とささるり 椒柏酒 椒酒 椒觴前楚歲時記曰元日進椒柏酒椒是玉衡星精也服之令人身輕能走柏是仙藥○崔寔四民月令曰正月之旦潔祀祖禰進酒降神畢子孫各上





敬上るるに故小私わんはゆりともを在りしるに物に在りし  
元正の日に君と侍りしもの紙額よりゆりしは日十九日又元の如く  
ゆりし  
元日節會 諸司奏 七曜御曆 氷掇 國柘奏

### 國柘笛 腹赤奏

日本紀曰持統天皇四年正月戊寅朔庚辰宴公卿内裏甲申宴公卿内裏仍賜衣

裳○續日本紀曰光仁天寶四年正月丁丑朔宴五位已上於内裏賜散○滑摺雜談云此節會ハ天子紫宸殿ニ渡御ナリテ群臣百官ニ酒ヲ給テ宴會有儀也宴會ト書テトヨノアカリトヨメリ 仁德天皇紀ニ宴會中與乃阿加利 大カタノ節會ノ各ニテ侍ルニヤ豊明節會 土月中辰 二ハ限ヘカラス神武天皇ノ御宇ニモ群臣ヲツトヘテ酒ヲ給シ事日本紀ニ見エタリ是ナトヲモ事ノ起

トハ申ヘキ欵云其式江次第ニ詳ナリ元日宴ト云題ニテトヨノアカリト讀ノル○じつきを川系のかたやりし乃そのののりつらん 顯昭 此人ハ顯輔卿ノ猶子其頃ノ才者博覧也宴會ヲ豊ノ明トヨノル證哥ナルヘシ豊ノ明ト云詞五節ニ限ルマシ由雜談抄イヘリ○諸司奏者○江次第曰可付内侍所由件 外任 次被 付藏人 奏中務省御曆奏官内省氷掇奏腹赤奏 若違期不參七日奏之 若當卯日卯杖奏等也奉仰仰外記往年玉卿就外弁後被仰下者外記傳仰外弁外記申外弁上卿 中古以來無此儀 ○七曜御曆者○日本紀曰推古天皇十二年甲子正月戊午朔始用曆云去戊年之百濟勅採用曆等書未○延喜式中務省式曰其後官人率陰陽寮入自建春門進七曜御曆云○公事根源曰七曜の御曆は日月火水木金土の七曜と云ふものつゆ乃曆云○氷掇者○



ナントニモ見エタリ作者心得ハ但始ヲモテ正トスレハ  
 早春ニ許用セリ云○腹赤者○肥後國風土記云玉名郡長渚  
 濱在郡昔者大足彦天皇誅球磨噲トコ還駕之時泊御船於濱云  
 又御船左右游魚多之棹人吉備國朝勝見釣之多有所獲即獻  
 天皇勅曰所獻之魚此為何魚朝勝見奏申未解其名正似鱒魚  
 耳歷御覽曰倍見多物即云介陪佐介今所獻魚甚此多有可謂  
 介陪魚其緣也云篤信云鱒又倭名腹赤○聖武ノ御時大宰府  
 ヨリ是ヲ奉ル今モ筑州千年川ニ鱒多シ千年川太宰府近云  
 ○公事根源曰腹赤の贅とて與と筑紫より奉る者ハ櫛て節  
 今なるとは仍りくくや腹赤は食糧とて食すくは以て名に於て食  
 たり十二代景行天皇筑紫の長渚とてゆふ是と約くとも其後四十八  
 代聖武天皇の御時天平十六年正月十四日大宰府より是と奉る是より  
 て其母の名をいふ儀と云くは定まらざり腹赤と云ふ名は乃  
 りりり年中行事初云此世の例乃長渚と云はる腹赤も此云の乃四十二位  
哥合

院拜禮  
 大府記曰延久五年正月一日辛巳院拜礼午刻諸  
 卿以下參集次垂晝御座庇御簾東次御出直御簾次東也

閑白前太政大臣右大臣并大納言中納言參議以上一列庭中  
 次殿上四位以下別當判官代等一列拜舞了之後從上躡次第  
 退嚮○中右記曰院拜礼可候否事之條年首拜礼者臣拜君也  
 非公儀不可謙仰被申可候之由○是院拜礼朝拜等凡下之年  
 礼之意也云○古今著聞集云仁平九年正月一日八条太政大  
 臣七十二ニテ立給ケリ一度拜シテ二度拜シ給ケリ此事礼  
 記ニ見エタリトカヤ○雜談抄云礼玉制篇曰八十拜君命一  
 坐再至ト云義ニヤトイヘリ

祇園削掛

元朝宣社紀事云晦日子刻祇園社神前燈燭之外

疵假令雖聞其声知其人不爭之不限之是懺悔伐而勸善懲惡

之微意乎房州千葉笑亦此類也丑刻許執行棄腰裏社司前驅

而執行登拜殿向神前而默坐少焉誦經咒東西棟內預建削掛

木左右各六屯是表十二月之數是稱卯杖而同時燎之傳言其

相向西則丹波國來年五穀不熟向東則近江國又然也依此石

西國之豐凶故居西方人高声呼近江近江東方人謂丹波丹波

款避其烟氣也其后社司新汲井水以削掛火調元朝之供物是

新年改水火之義也參詣諸人亦携其火而級家煮元日之美矣

○神社啓蒙曰祇園社在山城國愛宕郡八坂鄉所祭神三座午

頭天皇神代卷五男三女神八王子東少將井西

神代卷五男三女神根元抄云昔常任寺十禪師曰如大法師依神託負觀十八

年奉移山城國愛宕郡八坂鄉樹下其後昭宣公感威驗壞運臺

宇建立精舍歲德神元方棚紀事云陰陽家因來年之支干而

四方同考吉兆之方是稱得方倍

同每家向其方高張棚飾葦素建松竹獻供物并燈火而祭之是

謂年德棚凡新年出納物飲食類必先獻之神仙參詣万事經當

始自此方云蒲葦內傳云年德神者頗梨女所謂八將神母也北

天竺吉祥天王舍城王号高貴帝遊戲三界探題諸星名天刑星

降娑婆界改号午頭天王毘盧遮那化身頭戴犢肉猶如夜叉形

類人間雖求后妃而未得時有青鳥自空飛來似鳩呼曰我是天

帝使者與天王本同仕帝親我名曰毘首陀羅天王今欲得后妃

故天帝令我教告南海有沙渴羅龍宮是有三女第一金毘羅女

第二滯命女嫁北海龍宮難陀拔第三頗梨女負甚美燕為君可  
 宜之天王大歡乃赴南海其道遠八万里程也凌南海到龍宮此  
 間有巨且燕民之事龍王出迎天皇遂娶頗梨女既而經年誕八王子是則八  
 將神大歲神大將神大陸神歲別神也此歲德神甲巳歲寅卯丙戌  
 辛癸年巳午間庚申酉間壬丁年亥子間鎮座也云世倍此  
 方二向テ其年ノ有徳ヲ祈ルモノナラシ

毘沙門功德經 若夷 夷廻 大黒舞

紀事云 宗師街

頭賣鞍馬毘沙門天紙符并弱惠美須等福神之筒四民買之貼  
 門戶或供歲德棚元日拜之祈福素祚南都市中每年自吉野來  
 賣守福神之札元日曉巡市中高声謂須迎辯才天若有求之人  
 則賣弁才天之札二日曉又謂須迎毘沙門天則賣毘沙門天之

札三日曉又謂須迎惠美須猶京師元日曉天賣弱惠美須之札  
 云○雜談抄云古老傳云往昔八元朝寅時二大神人禁裏日花  
 門ノ外ニ參テ毘沙門經ノ文句ヲ訓讀ニ唱テ祝ノ儀ヲナセ  
 リ故ニ此者ノ黨類ヲ呼テ唱門師ト稱ス又元日毎ニ夙ニ候  
 スル故夙ノ者ト号ス夙ノ字音志久世誤テ志由久ト云夙ト  
 病ト音近キ故カ民家ヘモ元朝末明門へ來リテ毘沙門經ヲ  
 訓讀セシ事中古迄侍レ也當世絶テ沙汰ナシト云毘沙門天  
 功德經曰欲奉仕毗沙門者毎月元三日清身著新衣向東北方  
 称念毘沙門名号者得大福德決定無疑云○夷廻者是即傀儡  
 師ヲ云津国西宮ニ跡ヲ垂玉ヲ夷三郎殿歳ノ始ニ衆生ニ笑  
 ニヲシイサマセテ富貴ヲ守ラントノ託宣ニテ昔ヨリ西宮  
 ヨリ春ノ始ニハ都ヲ始方々傀儡マハシテ勸ムル也此傀儡

子ヲ夷カキ氏云鷺水モ夷廻トイヘリ又京大坂ニテ大黒舞ノ類ニテ夷三郎殿ノ姿ヲマ子ビ調ヲ鈎夕三サイナト囉モテト是ハ悲田寺或ハ四ヶ所ノ垣外ノ賤キモノ、業ナリ○大黒舞者是モ亦悲田寺垣外ノ類大黒天ノ姿ヲ摸シ面ヲカブリ頭中ヲ著テ民間ノ門々ヲ歌ヒ舞フ年々嘉祝ノ詞ヲ以テ新作シテ唄フ故ニ此唱歌ヲモ大黒舞ト云フナリ夷大黒ノ事正月十日霜  
故事要言云年ノ始ニ馬ヲ作り月甲子祭ノ下記ス  
春駒  
テ頭ニ戴キ歌ヒ舞モノ是ヲ春駒ト名ケテ都鄙トモニアリ是ハ禁中ニテ正月七日  
鳥追  
白馬ヲ御覽ノ事アリ是ヲ下ニウケテ侍ニヤ  
雍州府志云乞巧人自元日至十五日著笠以白巾覆面而敲手唱祝語倚門戶請米錢是号敲与次郎又稱鳥追元民間出自追

拂田疇鳥之  
辞者也云

### 傀儡師

事物紀原曰傀儡ハ漢高祖平城ニ圍マレシ時陣平力計ヲ以テ木ヲ以テ

美人ヲ為テ城上ニ立冒頓罔氏ヲ詐リ後人此ニ因テ傀儡ヲ為ト云○列子ハ周ノ穆王ノ時偃師トイヘル巧人アリ木偶人ヲ為テ舞シム盛姫共ニ觀玉ヲニ舞終テ木偶人瞬目シテ手ヲ以テ玉ノ左右ヲ招ク王疑怒テ偃師ヲ殺サントスヨツテ木偶人ヲ壞テ漆膠ヲ以テカラクリタルヲ見セ具疑ヲトクトイヘリ傀儡ハ夷廻ナリ其名異ナル故再出スニヤ○拾芥抄云大井川靈所七瀬ノ下ニ傀儡居住上一町許仁治ニ四以在成説注付之云嘉録四年百首寄傀儡意

大井川の  
為丸資慶卿記玉ヲハ傀儡ハ淀江口そのをほしをばよくつるれ



出度例ハ和歌ニ

冬 ことばふか松乃みりもまをれ今一志をたきまをり

後拾遺 春日山雲の乃松と云くちをりては万代と云ん 松園院

續手載賀 ねのくハる若代とゆつらん日九を乃屋のられ竹 後條院

### 飾繩 飾藁 注連飾

神代卷曰時手力雄神則奉兼  
天照太神之手而引而奉出於

是中臣神忌部神則界以端出之繩乃請曰勿復還幸云○土佐  
日記云のありくろふといふも注連の事○世諺回答曰志の繩といふ  
ものたる繩よりして繩乃とて終へぬものたは清淨なるいふれし  
るははるへぬとすふなる心より清淨とてく川也(子)神々の時々  
かろく注連といふ月の神と祝多る也○釈名云注連いゆやくは  
ともくか入といふひるなり繩かといひなり繩はくかろく○荆楚威

時記曰正月朔日帖畫雞戸上懸葦索於其上挿符於旁百鬼畏

之藁稿同○說文曰稗禾莖也即稽之和皮者也祭天以為席

薦注連等最所重也○和漢用葦索之意可知也○後成恩寺殿

墓疏曰九繩端出此釋其義又解其訓繩者直之儀神道以直為

本尤者陽德取清明之儀端出者絢索而不整雪其取餘之芒端

也是質朴而不飾之意故以直清質為神明

之德一條之繩而具此三德即注連也

王率后妃八王子及諸眷屬到廣遠國滅巨旦族其斷巨旦屍配

五節供行調伏威儀所謂摩年門松巨旦墓驗木而上結炭準送

火炉也○本草綱目曰白炭除夜立之戸内亦

辟邪惡云可掇辟邪惡之義蓋蓋之說如何

飾海老 蝦紅



倍謂之伊勢海老或稱鎌倉海老以為賀祝之者因倍春盤用之  
○時珍本草曰蝦音霞倍作蝦入湯則紅色如霞和漢三才圖  
會云勢州相州多有  
之狀詳見于此書  
和名安倍太知波奈○和漢三才圖會云橙樹高丈許周過於尺  
其葉扁大似乳柑而短背色冷五月開小白花九歷八年者結實  
也形如其氣苦臭霜後黃熟其瓣苦微酸不堪食至春色濃耐久  
夏後變色青新舊不可辨故倍呼名代々雖不暇而以為嘉祝果  
也  
懸鯛  
本朝食鑑云本朝每歲始千門萬戶令雙青松雙青  
作相對而立向上橫引于注連繩而中間懸于干鯛  
雙尾海老煮紅一箇及橙橘白枳昆布海藻裏白讓葉等數品官  
家用大千鯛其餘中小任意用之号曰懸鯛是祝壽耶辟邪未  
知

何然但我邦之舊流例也○紀事云元日小鯛魚一雙以藁索結  
兩喉挿齒朵并由都里乘懸竈上是稱掛鯛至六月朔日和羹而  
食之如此則辟溫  
疫痢病諸邪氣也  
若水包井井華水若水桶

江次第曰供立春水事舊年封御生氣方人家井一用之後廢而  
不用之自御厨子所付臺盤所女房供之於朝餉土高坏上置折  
敷和紙大土器盛立春水居折敷供之陪膳居之於高坏上一度御  
飲畢徹之○世談回答曰さくらも此日ハ井華水と云ふるも  
さくらも此日ハ井華水と云ふるも○公事根源曰菟玉の事月日はさくらも  
水と云ふるも此年中此の氣を除くもさくらも云ふるも  
況之云○御筆云水立をり元日わさくらも云ふるも今華立  
も用ひるもさくらも○本朝食鑑云今有稱堀井者能察地中水脉之

好處鑿之成井其淺深據水脉也不時初汲曰新汲水若人既汲之後汲之者非新汲水平且第一汲曰井華水○紀事云元日朝諸家新汲井水是稱若水倭俗以若字代老弱之弱而用之云是以元朝為若水也○嘉祐本草曰新汲水却邪調中下熱氣宜飲之○世本曰伯益作井黃帝始穿井井者穿地為井以瓶汲水謂之井○穀名曰井清也泉之清潔者也○穀名云井づるは乃ちまきと下と略する一説ありわつとも云者後代のやく家に井をくち一和よりわつより汲る也○桶糞曰汲水器也○穀名云井けりけり井おろく○包井衛生氣ノ方ノ井ニ蓋ヲシテ立春ニ開ヲ包井開ト云ナリ

**大服** 大服者点茶之  
名也○紀事云

其式点茶或漬塩梅椒於茗碗之内而合家飲之又獻賀客是謂大服用梅高年後面皮生皴而款倣監梅之皴面也椒服之令人

身輕能走○淡海志云正月詞ニ祝テ勢田ニハ大服茶ヲ点テ吹夕リ廻タリト云テ吞矢橋ニハ是ニ異ナリ旱ニ粥ヲ食テ今日ハ能カイ日和ナリト云ト云是互ニ猿人ノ多ヲ悅ブ也○今式云大ぬくとし中古極わたりしといひし服も又字なれど他もかきとるし頃通く松清蘭如く俳人方々く作らるる何ぞ禍福其詞もらんやと○大服やと口々にあはれり壽長源とありにその年類縁の愁わけて服と云ふもなれと○雜談抄云六十二代村上帝六波羅密寺ノ觀音ヲ信敬シ玉フ或時御腦ノ事アリ醫藥驗ヲ失フ當寺ノ本尊靈夢ノ告アリテ供スル所ノ奠茶ヲ服シ玉ヒテ御腦平愈シ玉ヘリ然レハ王上ノ服御スルヲ以テ王服ト稱シ毎歲元且ニ當寺ノ供茶ヲ召テ服シ玉フ由縁起ニ出云又足利家ノ時茶道盛ノ故ニ始ト云

雜談抄卷之二十一

若餅

三日ノ間ニ搗ヲ若餅ト云由古老イヘリ○雜談抄一説云三日ニ餅搗事有ヘカラス倍ニ餅ノ大小ヲ

云時少キヲ若ト云是小ノ詞ヲ忌テ云是賀客ニ饗スルニ便リ有ユヘニ少キヲ賄フル故ト云唯可為祝語而已○庖厨本草云倍名抄釈名餅令糯麵合并也胡餅著麻者細注倍云餅粉阿連是也元昇曰此説ヲミ

雜煮祝

紀事云元日朝良賤食雜

煮又盛雜煮并飯汁於小土器而供神仏又祭竈并井凡今日良賤調味多用鯽魚鯨魚鰯魚鮫子鰲海鼠串石决明并午為大根等云○雜談抄云雜煮ハ餅ニ大根羊躑鴉昆布ホアハビイリコ菘等ヲ加ヘテ羹トシ喰フ多種ヲ交ヘ煮ル故ニ雜煮ト称スル歟是ヲ畧メ羹ヲ祝フト云○事文類聚曰唐立春日春餅

生菜 躑鴉 春盤 齊人月令曰食生菜取迎新之意○羊躑拾唾曰元

朝餉餅 串汀州嘉靖丁亥志曰汀國人ハ餅ヲ眷テ賓客ヲ餐ス

貧キ人ハ市ニ買求

テ節会ニナスト云

羊頭ヲ云頭ヲ頭ト云テ所謂

祝語ナリ舌蕃頭木工頭ノカ

ミヲカリテ云羊魁正月及嘉祝ニ必用之者取多子之義也

躑鴉 陽国志

跋鴉 出干僕

傳倍悦フト云義ヲ含ム

大根 ツテ鏡草ト云由岷江入楚

ニモ見ユ○韓保昇蜀本草云菜服倍名蘿蔔按今雅云突蘆葩

孫炎注曰紫花菘也倍呼溫菘似蕪菁大根

倍名突蘆猶見冬之部春季ハ鏡州ト云ヘシ

開午房

開豆

紀事云用豆水煮大豆是謂用豆用午莩不煮而生午莩也如菁木盛之仍謂之菁木午莩又曰用午莩而種

共土器盛之而

大箸

又謂之羹箸說文曰箸飯敬也从竹者

敷於齒菜楮云

以象為之

○頌和各唐韻云筋波和名匙也字亦作箸倭倍用歲始

箸尤太故是謂太箸○雜記抄云箸折八落馬ノ相ト云將軍

義勝幼少ニテ治世ノ時元朝規式ノ箸折夕リ其年秋落馬ニ

テ失玉ノ御舍弟義政續テ治世時箸ノ不折様ニ家臣ノ取計

ニテ本古實ニ非ス民間ノ用

蓬萊飾

食積

紀事云倭倍新

年三方臺置海光熨斗昆布榎橙穗俵等先供賀客祝新年是謂

蓬萊臺云是唐立春日春餅生菜踰春盤而以算之○史記本記

曰海中有三神山曰蓬萊方丈瀛州僊人居之○列子曰渤海東

有山一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州五曰蓬萊華實皆

有滋味食之不老不死所居人

穗俵

漢鳴策本朝式曰奈々里曾神馬藻○漢語抄

曰奈乃里曾○倭名抄曰本文未詳神馬莫騎之義也○和漢三

才圖全曰此藻莖細扁長三四尺最長者丈許而有節小榎上有

細尖葉一團結小山子中空撚潰之有青出水初正青乾則黑色

西南海多有之冬取乾之以葉釋一握許折卷束之豫作采俵形

名穗俵為正

榎

本草綱目曰栢萩名榎側栢蕪頌曰三月麻花

月蓬萊盤飾九月結子其實成栢狀如小鈴○史記曰松栢

為百木長○漢武內傳曰藥有松栢之膏

あのもれ

小土器也名義

未詳疑クハ用豆用午房ノ兩種ヲ土器ニ盛テ雜煮ノ膳ノ丸  
右ニ置之此兩種ヲ盛ル物ト云ノ畧語歟又料ノ物ト云是モ  
亦兩種ヲ盛  
**搗栗** カチシリ 和漢三才圖會云搗栗連殼晒乾積破時  
料トスルカ 搗曰去殼及揅皮則肉黃白色堅味其美  
倭倍搗ノ訓ヲ勝ノ字ニカヘテ  
**串柿** カキ 同書云貫竹串乾者  
諸勝負ノ利アルヲ悦テ用之 也或貫繩乾之共下  
品也按此物其形狀似串海鼠故為嘉祝之物而用飾羹或蓬菜  
羹歟○酉陽雜俎曰柿有七絶一壽六嘉賓云○雜詠抄云萬物  
ヲ扱トルノ義ト云リ柿ト扱ト和訓近故ナラシム凡榘搗栗  
串柿昆布抽柿柿子搗髮斗梅干等ノ類飾ル心ナクテハ歲始  
ノ嘉種トナルヘカラス皆物々當  
**橙** ダイク 注見  
**柚子** ユカウ 和漢  
季ヲ專トシ又雜ノ物アリ下准之 三才

圖會曰檨椶柚屬也其枝葉花皆與柚無異實形  
狀亦似柚而最大トク 柑類惣名橘也故為祝物乎  
云包橘カクヨリ小也皮薄ク瓤ノヘカテ上ヨリ見ユ○時珍本草  
曰包橘外薄内盈其脉辨隔皮是也○唐故事曰近臣賜黃柑以  
黃羅包之人各一  
**橘** 和漢三才圖會云太知波奈和名橘類總  
枚是為傳柑宴云 名也今單稱太知波奈者乃包橘也專為  
果其皮為藥者乃蜜柑也云○大和本草橘ヲ蜜柑トシ又一種  
遠州白和柑子ヲ為真橘○時珍曰橘品十有四韓茂直橘錄詳  
也○月令廣義曰正月初二日賜橘於群臣則古今以橘為嘉祝  
之果○日本紀曰垂仁帝九十年春命田道間守遣常世國令求  
非時香菓今謂橘者是也聖武帝天平八年與葛城王之忠誠賜  
浮杯之橘勅曰橘者果子之長上人所好是以汝姓賜橘宿稱橘

姓始于此橘病称者諸兄ユツリ葉ユツリ交讓木支物異名子ユツリ絃葉ユツリ万葉和  
公也仍為嘉祝之物也 漢三才圖會ユツリ讓葉木倍作ユツリ楪○

字彙曰杜音圖旗竿也又橋也○埃囊批云杜ノ字ハユツリ葉

也世倍正月ニ是ヲ用漢朝ニハ旗ノカザリトスル由也○

枕草子云かへての月にはあもみえぬよのさほの二十日ユツリ

時ユツリきりかた人乃物もあつてわんがた又たさかきよひのさ

齒固の具ユツリしつゝいんをまユツリ此樹ハ新葉生トノヒテ後ニ

舊葉落故ニ讓葉ト各ク又和名親子草ト云共ニ和歌ニ詠ス

齒ユツリ采穗長裏白 本草綱目時珍曰貫衆ユツリ此草葉莖

如鳳尾其根一本而衆枝貫之故

名鳳尾根ユツリ名貫衆ユツリ云○和漢三才圖會曰葉似蕨及狗脊而葉柔

薄面青背白四時不死以飾ユツリ尤且嘉祝之物ユツリ一說齒采ハモロ

ムキト云和名アルヲ夫婦ノ相生ヲ祝スト之又一說齒采ハ

齒ハヨハイ采ハエダ采ハ長延ナル物ユハ齡ノ延ル義ト云

昆布 本草綱目曰生東海頰流而生出高麗新羅者葉細黃

黑色柔韌可食ユツリ○和漢三才圖會云其大者一株而

為林葉長二三丈謂之長昆布大低幅四五寸長二三尺海人用

鎌刈取之松前之產為最上專為嘉祝之物和名似嘉字之訓故

字○順和名曰比呂 葩煎 字彙曰粿米爆米曰粿○經驗方

米一名衣比須ユツリ云 日稻米使爆火食謂之白花米○

米花急就草ユツリ齧ユツリ周處ユツリ凡ユツリ記 ○袁仲郎詩集云爆粿穀於釜中名ユツリ粿

昔八九日賣之蓬萊臺ニモ敷之ト也今世用白米ユツリ豊後國ニテ

ハ葦索ヘモ白米ヲ包テ付 尉火斗 常為嘉祝之供ユツリ五万米

是ヲトミト云富ノ字ノ意 尉火斗 常為嘉祝之供ユツリ五万米

是ヲトミト云富ノ字ノ意 尉火斗 常為嘉祝之供ユツリ五万米

是ヲトミト云富ノ字ノ意 尉火斗 常為嘉祝之供ユツリ五万米

人代之人ノ形狀ナリ肩イカリテ腰ホソク寿ハ万歳ヲ保ト  
 古書ニアリト也○ト部古事記曰天照太神伊勢国五十鈴川  
 上ニテ神代ノ人形ヲ学ハセ玉ヒテ  
 熨斗ヲ作り玉フトナリ野老氏云也  
 俱青作三义似山薯云○野老漢語抄菟延喜式○和漢三才圖  
 曰蔓葉頗似薯蕷用小白花結青子三稜其根類老薑薯蕷之狀  
 最肥大者如甘藷而黃色有節多長鬚倍以  
 為野老以艱為海老共充嘉祝之食物云  
 海老 委見于上

梅干 梅ぢり

本草綱目曰梅其實酸曝乾為脯又  
 入羹臠羹中又含之可以香口○和  
 漢三才圖會曰白梅又鹽梅霜梅倍云梅脯也豐後之產肥大肉  
 厚味美云梅干ヲ梅ボウニトハ倭倍宝珠ヲ疑宝珠ト云カ如

倭子

少如意宝珠ニ比  
 セル賀詞ナルヘシ  
 其形狀恰如倭形仍祝語トセル歟○春耕糸切齒云倭子ゴ一  
 メ也小殿原ハ武家ノ祝語田作農家ノ祝語倭子商家ノ祝語  
 ト云○雜談抄云和倍海鼠ヲ呼テナマコト云齧海鼠ニ對シ  
 テ也倭子ト云其義未詳按ニ此者ヲ子ト称ス子ノ貴キハ太  
 郎ト云ヨツテ太郎子ト云ヘキカ父ワラコト略シテ云ニヤ  
 太郎ハ男子ノ称也此者海男子ノ名アリ可思合此者ノ形男  
 根ニ似タル故海男  
 子ト云云鑿說ニヤ  
 田作小殿原 和漢三才圖會云五万  
 米艱也正字未詳一名  
 田作又云古止乃波良漁家海邊石上或箕上擴乾小鱸也阿波  
 之産為上貯之耐久和諸物煮食常為嘉祝之供與艱熨斗並用

押鮎

江次第曰元日押鮎一杯煮鹽鮎一杯云土佐日記ニモ云

云香嗅鱗細不腥春初生月長一寸至冬月長盈則赴潮際生子

生已輒稿一名記月魚云又年魚ト云其年生ノ其年長スル故

也仍為新年嘉祝之

食鮎處之ニ可見之

而堅大於田螺春夏共多出其肉上黑中白盤曲隨殼有蒼腸去

腸煮食之其鹹高費每除夜及歲始為

必用酒肴言取千倍万倍貨殖之祝乎

珍日師衆多也其形似蝸牛其類多故有二名惟食泥水春月人

采置鍋中蒸之其肉自出酒煮糟煮食之云

此物為新年之酒肴者似海贏故並用者乎

海贏身

和漢三才圖會云海蝸倍云波比生海中小螺也色似田螺

螺看

本草綱目曰蝸蠃名螺師時

數子

同書云之子也割

腹出麵乾之黃白色為上臘月歲始及婚家以為

規祝之者取多子之義同以蝦取海老之義矣○

字彙說見于上○和漢三才圖會曰糲音稜同棋州天王寺民家

用河內上糯米穀畧濕而熬之爆脹而穉自脫去潔白如雪花云

昔ハ正朔ニ家内ニ撒之音アリテ賣ル說アリ今絶ユサレ凡

今モ其遺意ニヤ棋州今宮ノ戎市ニ賣ナリ又一說聖德太子

守屋大臣ヲ討玉音フ時稻皆ハセテ

兵糧ノ助トナル是ヨリ始ト云

水謂福沸云年男ハ其家々人ヲ撰テ定之先旧年煤掃ノ竹ヲ

以テ拂ハシメ除夜追儼ノ豆ヲ撒シムル事各當年ノ惠方ヨ

リ初ム是年男ノ役トスル處

春未猶家々ノ嘉例勿論ニヤ

庭竈

紀事云置火炉於庭上合家鋪席而團座是謂

年男

紀事云汲若水人謂年男煮此

籠前賣



庭竈云庭○說文曰庭宮中也从广廷声云然而庭竈ハ且テ宮  
中并宦家ニ其沙汰ナシ唯民間ノ祝儀ナリ倭俗民間ノ坪ノ  
内ヲ塲ト云庭字モ亦並用也竈○同曰竈炊竈也从宀龍声○  
和漢三才圖會云竈炊飲食資生命之重器恐有神每為清淨可  
也○旧事本紀曰興津彥興津姬此二神竈神也○酉陽雜俎竈  
神狀如美女名隗姓張名單字子郭夫人有六女常以月晦上天  
白人罪過云畿内ニ竈ヲ荒神ト崇メ平常清淨ニシテ香華及  
供物ヲ備ヘ祭ル月晦ニハ修驗者ヲ請ニ於竈前奉幣ニ誦真  
言以為荒神禳是酉陽雜俎ノ說ニヨル歟  
今庭竈ト云モ亦竈神ヲ歲首ニ祭ルニヤ

### 福藁

紀事云家庭敷藁是稱福藁○雜記抄云民家尋常不  
常ナル故正月ノ神ヲ祭リ勸請中不淨ヲ除ク心ナ

### 福藁敷

ルヘシ譬ハ庭道ヲ設テ神饗ヲ行シム義ニ

### 福沸 福鍋

同云又唯賀客ヲ送迎ノ為トモ見ユルナリ  
紀事云汲若水煮之謂福沸云福鍋者用福沸之名也○雜記抄  
云和倍ニ七日ノ粥ヲ呼テ福ワカシト云是福トハ餅ノ異名  
也其故ハ古ハ福引トテ餅ヲ二人シテ引合事侍リシトヤ其  
上餅ノ異名ヲ福生果ト云リ今朝粥ニ餅ヲ和シテ煮熟スル  
ヲ云ト云野洲邊ニテ鏡餅ヲ福出ト稱ス福生果ヨリ云ニヤ  
或說正月四日ニ神棚一ニ今日供シタル飯汁羹ノ類ヲ徹ス  
ルヲ棚サガシト云是ヲ集メテ  
一ツニ煮熟ノ合家食是福沸也

### 毬打ゆりく

續日本紀

日聖武天皇神龜四年正月教王子乃諸臣子等集春日野而作  
步毬之樂云○顯昭袖中抄曰十節錄云黃帝取蚩尤頭毬之令





の的ニニ至<sup>ル</sup>画ハク中<sup>ノ</sup>時<sup>ヲ</sup>除<sup>ク</sup>○雜談抄或說云然ハ  
正月ニ射戲スル濱弓ハ虫丸カ眼ヲ射破ル義ナレハ實ハ破  
目弓ナルヘシ通唱ノ宜ニヨリ濱弓濱矢ト称ス又魔ヲ破ス  
ルノ意ニテ破魔弓トモ書濱ノ字ニ心ナシト云○或說云弓  
ハ不祥ヲ被<sup>フ</sup>物ナレハ中天邪氣ノアル時ハ必ス弦ヲ鳴ノ  
被<sup>ル</sup>事<sup>ノ</sup>故ニ神道ニハ採物ノ中ニ弓ヲ用ヒ佛家ニハ弓矢ヲ  
定慧トシ又惡魔降伏ヲ表ス故ニ吾邦正月ニハ王宮神社ニ  
射礼ヲ行ヒ或ハ士人小兒ノ弄トスル<sup>ト</sup>是年中ノ邪氣ヲ被<sup>ル</sup>  
為ナリ故ニ云破魔弓其所由来者尚矣故ニ異域モ已ニ評之  
北史卷四<sup>十四</sup>倭国列傳曰每至正月必射戲飲酒其餘節略與華同  
文獻通考日本部<sup>三</sup>モ此事アリ是  
治世モ武ヲ忘サル意ニヤト云

### 年玉

紀事云正月士農工商及僧徒神官各執

贊<sup>ニ</sup>互相賀<sup>ハ</sup>凡<sup>レ</sup>新年互<sup>ニ</sup>贈<sup>ル</sup>答<sup>ス</sup>之物總謂<sup>フ</sup>年玉○雜談抄舊事本紀<sup>五</sup>  
神武天皇元年紀曰歲辛酉正月庚辰朔宇摩志滿治命先軼天  
端亦堅神楯以齋兵謂五十楯亦云今木刺綾於布都主釵大神  
奉齋殿内即藏<sup>ル</sup>天皇瑞宝為<sup>レ</sup>天皇鎮祭之時天皇寵異特甚詔曰  
近病殿内<sup>ニ</sup>兵因<sup>テ</sup>足<sup>レ</sup>尼其足<sup>レ</sup>孩<sup>ク</sup>自此始<sup>ル</sup>矣云此天ノ瑞ヲ奏セ  
ラレシヨリ代々ノ天皇元日之朝賀奏瑞トテ二人ノ者庭ニ進  
テ去年ノ日出度嘉瑞ヲ因<sup>テ</sup>ヨリ申セハ夫ヲ記シテ今日奏  
祝スル由也是皆君ヲ賀シ世ヲ祝スル礼義之信ナリオオ口  
ケナガラモ民間ニモ年始ニ音物ヲ相互ニ贈答スルモ人々  
賀シ春ヲ祝スル祝義之信也唯和倍年玉ト称スル自<sup>ラ</sup>瑞宝之  
義ニ相似タルモ宜也今按  
年玉ハ年ノ賜ノ略語カ

### 寶引福引

雜談抄云餅ノ  
異名ヲ福生果



ナリ是以文武官ノ諸人務テ兵ヲ用ヒ及ヒ馬ニ乘事ヲ習フ云  
○本州時珍曰按許慎云馬武也其字象頭髦尾足之形牡曰騊  
牝曰騊一歲曰羸二歲曰駒三歲曰駉四歲曰駉梵書謂馬為阿  
濕婆馬云月以十二月而生其年以齒別之云○周禮曰凡馬八  
尺以上為龍七尺以上為騊也六尺為馬○和訓義解  
云ムハ馬ノ音誤ノ音ニ也ムハハハノ助紐也

### 藏開

或說云正月ノ藏用ニハ内裏ニテ三種ノ神宝ヲ御藏ヨリ用  
始ト云○雜詠抄云和倍農工商賈ノ類歲始ニ藏ヲ用テ積蓄  
ノ金銀米錢ニ不限一切ノ貨財ヲ取出シ用ニ充テ賣買ノ事  
ヲ調フ尤其年始ナレハ吉日ヲ撰テ庫藏ヲ用テ云メリト云  
○說文曰藏物所蓄曰藏又府藏朱子曰藏貨財云府○礼記疏曰亮藏曰倉  
朱藏曰庫○順和名曰困一云庫萬呂一云与奈一云庫乃久良○

日本紀曰推古天皇十五年每国屯倉ヲ置ル文武天皇義倉ヲ  
立ラレ淡路帝常平倉ヲ置レ皆貧民ヲ救ヒ玉フ仁政ナリ此  
奈越後守実時カ孫頭時カ子金澤越後守平貞頭称名寺ノ内  
ニ文庫ヲ立和漢ノ群書ヲアツム世ニ金澤ノ文庫ト云是也

### 湯殿始

雜詠抄云和倍ノ歲始ニ沐浴スルヲ湯殿始云云  
世倍ノ云処皆同然ニ藤大典侍ノ御房ノ御湯殿  
記ニ月テ按ニ御湯殿トハ臺盤所ヲ云臺盤所ハ倍云臺所ニ  
同シ故ニ臺所始ト云意ニテ湯殿始ト云ナルヘシ別ニ世倍  
初湯若湯ト云類ニ非ス年中人ノ生命ヲ繫ク食物  
等ヲ調フル其元ナレハ第一臺所始ヲ祝フヘキ也

### 飛馬

千梅雙纒輪ニ梁塵秘抄ヲ引テ飛馬始トカケリ春耕糸  
始切齒是ヲ難メ云毛馬ノ二字ヲ書時ハ右ニテモ濟ヘシ

曆ノ元日ニアルモノハ馬ノ事ニ非ス真名曆ニハ火水始ト有ト部家秘説ニテ是又馬ノ事ナラス深秘ナリト云或書ニヒメハジメテ云米ニ六ノ異名アリ内裏ニテハ米ト云其外ニテハ米米米米ナド云柳米穀ノ貴事五昧六根六識陰陽呂律米ヲ以テ此昧ヲ養フサレハ食ヲ炊ニ金竈水火薪イツレモ木火土金水ノ五行ノ氣運ト集リテ飯トナル尤夕ウトムヘキノ義ナリ然レハ年始ニハ第一米始アルヘキハ人壽百歳モ生命ヲ繫ハ此物ナリ○枕草子みもひわト云事アリ○春曙抄云糲糠衣々々也或説ニ非米非粥之義也○非米非粥トハ飯ノ類也米ハ蓬萊臺ニ始リ粥ハ七種ニ始ル飯ノ始モ亦アルヘシ何ゾ馬乗初**着衣始**季吟云衣ヲ着初ル祝ナアリテ毛馬始アラシヤ

論語郷黨篇曰吉日必朝服而朝朱子注吉日々朔也○季氏曰礼云正月吉所謂月吉也○雜談抄云曆云々ノ着衣トモ衣裳氏書衣ヲソトモ讀也衣裳ハキヌヲキト略モスソヲソト略タル也 **船乗初** 雜談抄云舟ヲ乗初トテ一歳ノ祝義ヲナス曆ニモ記之云撰列大坂ノ船乗初ニハ舟ニ松竹注連ノ飾リヲ立船長神へ鏡餅神酒等ヲ供シ水主ヲ揃ヘ凡一タン許乗出テ曹庚ト也其日船持ノ家々酒肴ヲ調ヘ合家嘉儀ヲ催シ年中巡船ノ海上風波ノ難ナキヲヲ神ニ祈リ自モ祝フ也○神代卷一書生鳥磐據樟船輒以此船載蛭兒須流放棄云○日本紀曰神武天皇戊午歲即位三年前也春二月皇師遂東舳艦相接友到難波碇○又曰崇神天皇十七年秋七月朔詔曰船者天下之要用也今度邊之民由海船以甚苦

步運其令其因得造船舶冬十月治造船○淮南子曰古人見窾木浮而知為舟○周易曰剡木為舟剡木為楫舟楫之利以濟不通○呂氏春秋曰虞始作舟其外物理論化胤墨子巧倭山海經番禺東哲舜蒙記伯任世本其鼓貨狄皆是作舟之人也揚雄方言曰自開而西謂舟為舩自開而東或謂之舟○唐韻曰舩海中大舩也順和名曰却與能布祿又曰舩小舩也○釋名曰舩三人所乘也順和名曰豆利布祿○釋名曰舩舩小而深者和名曰比良太倍云平田舟曰舩和名太加世高瀬舟也又曰舩舩薄而長者曰舩和名曰比良太倍云平田舟○和訓義解曰フ子ハウカブメクルノ上下略フ子ニ通又子ハ根也岩根岸根ニウカブ也

**舟玉祭**  
撰津國凡土記云美奴賣松原今稱美女者神名其神本居能勢郡美奴賣山者息長帶比賣天皇幸筑紫國時集諸神祇於川辺郡内神前松原以求

禮福干特此神亦同來集曰吾護估仍諭之曰吾巫住之山有須義乃木名宣代採為吾造船則乘此舩而可行幸當有幸福天皇乃隨神教遣命作舟此神舩遂征新羅還來之時祠祭此神於斯浦并留舩以獻又名此地曰美奴賣又云敏馬浦○雜談抄云攝住吉社ノ側ニ舩玉神トテ小社有是則舩神ニテ侍レハ美奴賣ノ神ヲ祭レル也然比舩魂ノ義ハ住吉社家者流ノ神秘云此舩玉ヲ尋常モ舩中ニ崇メ奉ル所也殊ニ歲首ニハ餅餽神酒其外祭奠ヲ整テ祭之云○和漢三才圖會云舟神名媽祖娘倍謂之舟菩薩唐舩來于長崎間所祭神是也乎

**幸木 幸**  
本朝以住吉大明神為舟神也舟玉社有於末社

**菟 菟菜盒子**  
幸木按ニ粥杖ノ類ナリ北國ニテ幸木ト云テ女ノ腰ヲウツヲ云又門松ノ根ニ立



木ヲ幸木也歩木ナト云藁盒子ハ藁ニテ盒子ノ如クアミテ  
門松ニ結付テ供物ヲ此内へ備フル也幸籠モ此類カ未考幸  
與福和訓同  
所謂祝詞也  
三物連歌同俳諧 裏白連歌同

### 俳諧

紀事云正朔連哥俳諧各用席凡於京師連哥長是號  
花下又謂宗匠每年今朝其一家中玩其事者及弟子  
等聚其宗匠各作連歌其第一句謂發句自其發句至百句是  
唯詩句稱百韻然對其發句之第二句稱脇第三句作之為榮而  
近此三句稱三物今朝隨作之則割剛氏鑄梓而賣市中近世俳  
諧亦然高声呼連歌俳諧之三物而往來街衢○雍州府志曰北  
野社正月四日有裏白連歌凡連歌懷紙四枚也中古執事誤而  
脫行面不記之自是為流例存片白紙又別添一枚為五枚依号

者也云俳諧  
亦效之矣

### 御慶

新年良賤互相偶謂  
是歲初之祝詞也

### 去年今年

雜談抄云貞德說ニ去年今年春也去年ト計モ春也今歲ト計  
ハ句ニ可依師說連歌ニハ去年ト云詞ハ春也今年ハ雜也云  
句体ニ依ヘテ後拾遺いふゆゑたゞりたゞりたゞりたゞり  
コトトリクハ云々ト小大君 尔雅曰唐虞日載高曰祀周曰年名  
不同而義一也皆所以成一歲之功也○說文曰年本季作稔熟  
也从禾干声今作年○示雅曰稔也謂歲一稔○說文曰歲本屋  
也越歷二十八宿宣徧陰陽一年行一次而  
四時功畢故夏以歲為年从步戌声云  
君春 是ヲ大君  
ト云鳥丸  
資慶卿ノ書玉ハルモノニ君トヨム事ハ大君ニ紛レユヘ  
築也ノ内ニテハ讀ハカラス又惣別氏一也夫モ君ナラテ誰

ニ哉ト元ヨリ熟タル詞ハ  
千代春 又千世初春氏百世万  
代等古歌ニ見ルヘシ

新年

新讀古今 去來ねとつらう言はるる  
棒釣言 雪玉集

わきまをとりてみるかみ心せらるる  
道遙院

わきま

万葉集曰荒  
珠之年又璞

荒玉兼玉未玉○仙覺抄曰アラ玉トハ改ルト云心也或云玉  
ハ一口ハスニ滞ラス走ル物ナレハ疾心也万葉ニ○未玉乃

年往還春立者未都吾屋戸介  
鶯者南計 右中舟家持

若き年

若キ年作例未考  
初雞 御筆曰元日朝雞ノ鳴ヲ云寅尅鳥  
初ル鳥ヲイハハ夜分勿論也元日

ヲ雞且臣云○格物論曰雞有丹白鳥三色知時畜也皆積陽火  
德之精也故陽出而雞鳴以類感也○說文曰雞警也能考時也  
○索隱曰三踴三鳴也言夜至雞三鳴則天曉乃始為正月一日  
言異歲也○和漢三才圖會曰和名加今又云久太加今又云木  
綿附鳥倍云庭鳥雞家々畜之馴于庭因稱庭鳥又稱家雞以別  
野雞其種類多尋常雞倍呼名小因能鳴告時而丑時始鳴者稱  
一番鳥寅時鳴者稱二番鳥人賞之丑以前鳴者為不祥倍謂之  
宵鳴○廣志云大者曰蜀和云蜀雞倍云唐丸小者曰荆和云所謂其雞曰鷲楚  
書名雞曰鳩七咤雞類甚多五方所產大小形色往々亦異江南  
一種矮雞脚統二寸許若群雞夜鳴者謂之荒雞事見黃昏獨啼  
者主有天恩謂之盜啼老雞南人以雞卵畫墨煮熟驗其黃以卜  
吉凶又以雞骨占年其鳴也知時刻其棲也知陰晴古人言雞能



# 吉書書初

三口中傳抄曰可行吉書事年始慶賀移徙嫁  
張云○紀事曰元日公武兩家及地下良賤各

試筆是謂書初公家試其業武家亦弓馬劍術鈇炮類各試之○  
羅山文集云我朝年甫写字者皆稱試筆故試簡試免試類試觚  
試毫或稱試春此皆然蓋叢林家作偈者之所初為乎官家先儒  
學士之文集未之見也宋六一居士有試筆之詩唯言試筆之好  
惡也○故事要言云元日筆始二ハ王羲之カ月儀書ヲ用ヘシ  
其文曰日往月來元正首祚大蕩告辰微陽始布聲無不宣和神  
養素云尋常凡倍ノ用之ハ朗詠長生殿裏春秋富不老門前日  
月遲保胤わく公九のくわに中とりてよのの字かきあつる

# 彈初

倭倍鼓琴瑟之類謂之彈也是亦歲首試其業也琴音禽  
和名古 箏音爭和名古 箏音乃古止 箏和名古 琴操曰伏羲作琴以

修身理性及其天真也琴長三尺六寸六步象二百六十日也廣  
六寸象六合也上方上 文上曰池也池水平 下曰瀆也又或云文上曰岩池下若池水平也 前廣後狹  
象尊卑上山下方象天池五弦象五行或五 大弦君也寬和温小弦  
臣也清肅不乱云 黃帝ハ廿五弦伯雅十三弦トス本邦二傳ル  
一宮穗物語ニ詳也○和琴和名夜方 倭名抄曰日本琴體似箏而  
短小有六弦一種有鳴尾琴止比乃 相傳云日本武尊始作双小弓  
六張成音今製亦有六弦如張六弓是本朝樂器之始也○琵琶  
胡 胡拔音倍 用撥琵琶本出於胡中馬上所鼓也魏文帝造之云本  
朝仁明天皇御宇真敏入唐琵琶曲傳來是其始也朱雀院御宇  
博雅三位同息信義信明最為堪能也○三線三 五雜俎曰三絃  
常合簫而鼓之然多淫哇之詞唱優之所習耳夫子謂鄭聲淫○  
和漢三才圖會按琉球固好多用之然不為樂器婦女里子等每

鼓之○鼓弓未詳其始形似三絃小不用撥以小弓絃鼓之○廣博物志曰夫樂者先王之所以飾喜也軍旅鈇鉞所以飾怒也故先王之喜怒皆得其齊焉喜則天下和之怒則

吹初 字彙曰吹昌瑞

暴乱者畏之先王之道禮樂可謂盛矣云切風也又鼓吹凡吹笛簫成音者皆謂之吹云是亦試笛簫之音也○簫笙簧 倍云匏倍云本曰隨作笙長四寸十二簧象鳳之身

正月之音也物生故謂之笙○禮明堂云女媧氏造笙云○甬篳茄管悲篳 和名比千利岐徐景山云胡人牧馬截骨為筒用蘆貫首吹之以

驚群馬云一說漢張騫所作為云○笛 音橫笛和名与古布江筆談云有雅笛羌笛二種○律書樂圖云橫笛出於羌張騫首傳一曲李延年

造新声二十八曲○簫高麗笛 和名古万布江或說云篳篥聖德太子高麗沙門惠慈傳授云玉天王寺時因各人笙八四位

盛定古今無乃也笛ハ袂衣中將各人云○尺八ハ唐土音化和尚ノ作ナリ楊貴妃馬嵬ガ原ニテ殺サル悲ノ声ヲ學ト云

舞初

紀事曰正月四辻家有樂始舞人樂人來集多有陵王納曾利云○禮月令孟春之月命樂正習舞云○日本

紀曰天武天皇十二月春正月己丑朔丙午是日奏小墾田舞及高麗百濟新羅三国樂於庭中同朱鳥元年正月壬寅朔己未

同朝庭大舖是日御御窟殿前而倡優等賜祿云今正月十七日禁裏舞御覽清涼殿東小庭有舞樂此節舞樂未始前大隅高橋

隔年交勤齋庖丁舞樂畢後有鶴高盛等獻群臣亦賜之云抑舞曲隘觴ハアミ夕ノ說アレ氏蔡邕月令章句舞ハ樂之容也云

呂氏春秋陶唐氏云始陰多滯狀人氣壅閉筋骨率縮故為作舞以宣導之トイヘリ是等皆人間ニ墮タル作業ナリ專佛世界

ヨリ世ニアマ子ニ十方浄土佛菩薩ノ在ス御元ニ妓樂ヲ不  
奏ト云フナシ殊ニ都率内院ニハ常ニ万秋樂ヲ奏シテ三會  
ノ曉ヲミツアイ夕當来ノ導師讚嘆シ奉ル月宮ハ霓裳羽衣  
ノ曲ヲナシ虚空ヲ行動シ玉ヲ昔天竺ニハ大樹堅那玉笛ヲ  
吹玉琴ヲ彈スレハ如葉ハ起テ舞ヒ  
阿難ハ声哥シ玉フト云以上體源抄出**松籟** 謡初下字集  
子○紀事云公武兩家有松柏子倭俗正月三日至十五日唱謡  
或為鼓舞祝之稱松柏子松取長久之義三日西東本願寺有能  
三番末寺僧徒著裝束勤之其後能大夫或勤之是謂續能云○  
豐臣秀吉公家譜曰天正十五年正月二日有謡初諸士皆獻賀  
儀云○御當家亦二日有謡初有獻諸家賀儀或賜群臣宴之式  
○詩人玉屑云放情曰歌悲如蛩蛩曰吟通俚俗曰謡云○或說

云謡能藝ハ桓武天皇御宇ニ日吉ノ社ノ御前ニテ猿三匹寄  
合テ手ヲタキキ舞踊リケリ則山王権現ノ御示現トナリ是  
ヲ字テ近江大和ニ猿樂トテ四座ヲ定メ近江ノ猿樂ハ猿ノ  
字ヲ用大和ノ申樂ハ日ヨミノ申ヲ書トイヘリ人皇三十四  
代推古天皇御宇豐聰太子國ヲ監シ天神地祇ヲ祭祀シ給テ  
以テ安國利民ノ政ヲシキ玉ヲ因テ六十六番ノ曲ヲ作り河  
勝ニ命シテ遂ニ橘ノ内裏ノ紫宸殿ノ前ニオイトテ此業ヲナ  
サシムヨツテ四海波穩ニ萬民康樂也太子其神樂ヲ以テ神  
ノ字ヲ折テ是ヲ名付テ申示ト云説文申亦神也大歳申ニ有  
トキ猿ヲ以テ是ニ配ス故後世是ヲ始トシ猿樂ト云也其後  
村上天皇万機ノ暇太子ノ筆スル所ノ申樂延年記ヲ見玉ヒ  
群臣ニ告テ曰上諸神ヲ敬ヒ下万民ヲ安スル事申樂ニ過夕

華嚴寺法華

ルハナレトテ則川勝ノ遠孫泰氏安ニ命シテ重テ此伎樂ヲ  
字ス又紀氏アリ氏安カ女弟ムコ也故ニ二人凡ニ是ヲ起ス  
氏安二十九世ノ孫ヲ金春ト号ス大和山滿井ノ座是ナリ大  
和四座ト云ハ結崎<sup>サキ</sup>觀世坂戸金剛山滿井<sup>金春</sup>外山室生是也猿樂ハ  
唐ハ散樂ト云又百戲<sup>ハクシ</sup>氏云杜氏  
通典散樂ハ階以前ニ謂之百戲  
初商初賣<sup>賣</sup>初買初

### 店卸帳閉帳書

紀事云正月四日市中諸商人亦始  
其事凡裁補年中所記物價之簿冊  
是帖綴而各祝之倭倍帖謂帳諸商今日綴年中買賣之簿書是  
紙帖綴<sup>ハクシ</sup>饗酒食互祝之云○雜談抄云帳面ニ大福ノ字ヲ題ス  
其根源洛陽ノ上菩提藥師堂ヨリ始レリ縁起云本尊ハ推古  
天皇六庚午聖德太子彫刻シ給ヒ大和國廣瀨郡宮田郷ニ伽藍ヲ

建テ藥師ヲテ本尊トシ造營事終テ大工鍛冶諸商人ニ金  
銀ヲ給フ各富貴ノ身トナル奈良北京難波堺ノ輩此縁ニア  
ヤカラント此堂ニ來集テ帳ノ上書ヲ大福帳ト題スル事大  
福寺ヨリノ義ニヨレリト云文龜ノ頃此寺今京ニ移今絶

### 歳旦開

正月撰吉辰連歌誹諧各用席此事アリ歳旦トハ  
歳首ニ賀詞ヲ発句ニ作りタルヲ云今世ハ冬ノ  
内ニ門第ノ句ヲ乞集メテ縷梓是ヲ一帖トシテ歳旦帖ト云  
此一帖ヲ門中へ送ルナリ其事ヲ始ル日ヲ歳旦用ト云○今  
式云歳旦ハ手際モノニテ佳句稀也尤禁誡ノ詞手亦於乘送  
假名ニモ心ヲ付ヘシ假令ハ高砂ノサシヅモリクテ老ノ鶴  
ノト云事アリ觀世凡近ハツモリクテト切テ訊ヒシ也云續  
クレハ手負ノ鶴トキコフル故也此類イカホモ有ヘシト云

節振舞 朝節夕節 節小袖

紀事云京師信自元日至晦日親戚

朋友互設酒食饗忘謂之節云節者節句ノ下略ニヤ節小袖モ

准之知ヘシ朝夕ハ饗忘ノ時刻ヲ云○荆楚歲時記曰元日至

於月晦並為脯聚飲食士女泛舟或臨水宴樂按每月皆有弦望

晦朔又正月初年時倍重以為節也弦三日望十五為節トハ佳節ト

定レ意ナリ和倍正月親戚ヲ饗スルヲ節ト云ハ據之乎○法

苑珠林曰唐長安凡倍每至元日已後遍飲酒相邀迎號傳生酒

松内注連内春かが

正月十五日迄ヲ松ノ内注連ノ内ト云十五日ノ朝明戸ノ

飾リヲ九義長ニ爆ラス也江戸ニハ七日迄ニテ門戸ノ飾ヲ

除ク近來ノ風倍ナリ黒田家ハ古來ノ如ク十五日迄飾アリ

春ナガトハ是モ祝詞ナリ

初芝居

紀事云正月二日四條河原淨瑠璃歌舞妓等

初春ニ三春ノ季長キヲ云

始之是稱初芝居武江堀町大坂道頓堀等亦然凡年中節句後

宴神事後日其方士農工商并人家奴僕以此日為休暇邀遊任

意此等多聚見此芝居芝居者古無襪布四垣亦立之唯坐芝上

而各見之依稱芝居和倍謂原野曰芝棧布元假皮也今誤稱棧

敷○雍州府志曰歌舞妓元出雲大社巫女有號久尔者一轉神

樂歌舞古稱白拍子之類相比乎元録年中有名護屋三九衛門

者元武人而落魄生也在京師則与彼女密通共謀之作歌舞妓

之曲又稱猿若者三九衛門所每赴之娼家奴隸男有猿若形只

如猿猴性魯鈍不通人情三九衛門常玩之今世稱狂言猿若者

始之遂祇園社南門用場催之是歌舞妓之始也自茲遊女長仇



渡嶋其使遊女狹者教歌舞施藝能良賤集誠訛人心乱国滅家  
之基岳過之依之禁女藝寬文中又始若衆歌舞妓云一說芝居  
号南都與福寺南門前  
二月新能出於草居也  
**千壽万歳** 紀事曰大和国窪田著  
尾兩村千壽万歳兩座

大夫来所司庭為鼓舞凡千壽万歳出自窪田著尾兩村在南都  
西南相去三里許此內有兩流則窪田著尾是也窪田大夫著尾  
大夫准九部右部而稱之云千壽万歳正月五日禁裏木造始此  
日千壽万歳并猿舞東御庭来云是季吟が千壽ハ猿廻云又千  
壽万歳ハ万歳樂テ踏歌ノ節会ノ字トイヘル也凡京師舞猿  
者有六人倭倭狙公謂猿麻波志此外妄不能使猿又伏見有六  
人○千梅篋纏輪猿曳常ニ有ハ禁庭ニ參  
リテ舞心ナクハ無季ト云ハ誤リ前猿曳ノ下見云  
**万歳** 是七千壽万  
歳ニテ千壽

ヲ略シテ云ニヤ○岷江入楚曰昔正月十四十五日京中遊士  
月ニ乘ノアナタコナタ歌ヒ舞シヨリ未代ニ千秋万歳ト云  
テ逸典ヲ催ス事アルハ是少余凡也云千壽万歳大和ノ外モ  
有ケルニヤ○御湯殿記云元龜三年正月五日北島ノサニ  
まん云三人系云北島者指南抄一系よりわそのる三町云云  
然ハ都ノ内ニモ有ケルニヤ今万歳ト稱スルハ鳥帽子素袍  
ヲ着シ鼓ヲお早歌ヲ唱フモノ也又三河国ニ一汎アリ或説  
大江定基博學大才ニシテ佛道ニモウトカラ又人ニテ正月ノ  
祝モ目出度事ハフリタリトテ我知行所ノ百姓ニ教ヘ佛法  
東漸ノ歌ヲウタハセ春ノ始ヨリ世事ヲ忘ルハ媒トセリ今  
ノ世ニヒロマリシ  
**御降** 雜詠抄云世信歳始ニ降雨雪ヲ  
オサガリト云按ニアニサガル  
三河万歳是也云

雜詠抄卷之十一  
御降



荊楚歲時記曰正月朔日帖畫雞戶上懸葦索於其上

中爆竹畫雞貼之鏤五色土戶上以壓不祥云

如願 歲時記曰有商人過清湖見清

湖君君向所須有人教云但乞

如願君許之果得一婢如願即其名也商有所求悉能致之後因

正且如願晚起商人趨之走入糞壤中不見今人正且以細繩繫

偶人投糞掃中云令如願○五雜俎云國中信不除糞土至初五

日輦至野地取石而返云得室則古人喚如願之意也云

段灰飛 歲時記云立春日取竹為管取段為灰以段葶灰實

律之端曆者候氣至則灰飛而管通以應六律云

春盤生菜 齊人月令曰立春日食生菜取迎新之意云

立春日以春餅生菜相饋送号春盤○本草

時珍曰五辛菜乃元且立春以葱蒜蓼蒿芥辛嫩之

菜雜和食之取迎新之義○杜甫詩春盤細生菜

綵燕 戴春燕 荆楚歲時記曰立春日悉翦綵為燕戴之帖宜春

字于門○王沂公春帖子云綵燕迎春入髮云○

歲時記曰立春日貴戚之家翦綵為小幡謂之春幡

或懸佳人之頭或綴花枝之下又翦為春蝶云

初子日 子曰好い小松川 子曰の松初子風の玉夢

扶桑略記曰宇多天皇寬平八年閏正月六日有子日宴行幸北

野雲林院○管家文章曰扈從雲林院不勝感歎聊叙所觀序云

予亦嘗聞于故老曰上陽子日遊厭老又曰倚松根以摩腰習凡

霜之難犯也和菜羹而啜口期氣味之克調○拾芥抄曰正月子



令者也。凡鞍馬山中不羶，雞言雞好食，蜈蚣之故也。○元亨叔書曰：當山者，大中大夫伊勢人之所創也。大夫歸，允篤常曰：安得勝地，建道場，安觀音像。延曆聖德太子之間，夢往城北之山，有翁鬚髮皓，告曰：此地甲天下，山似三杵，常出五色雲，汝宮練若，利益無量。大夫夢中問曰：誰子翁？曰：王城鎮守貴船明神也。覺而未知何處。大夫有白馬，常所騎也。裝鞍，語曰：昔摩騰法蘭載舍利像，經白馬，未震且然者，白馬者靈畜也。汝定知我夢地，乃放馬，從一童子，其馬向城北而去。至一山河，駐茅草中，童還告此事。大夫往，見其地，宛如夢中，通於茅裏，得毘沙門天像，刻一字，安像。故号鞍馬寺。大夫以為我欲安觀音像，今只置天像，願未果。予其夜夢童子年十五，許告曰：當知觀音多門，各異體，同夢覺，後解疑。緣起一八。南都栢授寺僧鑑禎鑑真徒也。室龜元年光仁正月四日，初寅日感得。

故今世正月初寅日，ヲ會式トシテ天下ヲ豐饒ノ修正ヲナシ万民參詣ストナリ。番卸オシ紀事云：初寅詣或又用第

二日，此日鞍馬近處往還路邊之西山岸高構小菴，自其內著繩下，蕘於路邊，參詣男女有欲求燈石者，則納錢於蕘，則以所著之繩，投上之底，其錢之多少，而入燈石，而再下之，是謂蕘下操。其蕘者，鞍馬地出生之地下人，而剃髮鬚者，交勤之世，称鞍馬坊主和倍，劬法中之例，呼剃髮人專。初卯オシ正月初卯日詣，檜別住吉称坊主燈石，此山之名產也。神社是謂初卯詣，今日於社中授神符於參詣之諸人，是謂卯札。○旧事紀曰：底筒男命，中筒男命，表筒男命，此三神者，津守連等齋祠。○日本紀神卷曰：表筒男，中筒男，底筒男，三神誨之曰：吾和魂，宣居大津津中倉之長峽，便因看往來，於是隨神教，以鎮座焉。按表津少童，中津少

詳矣詳良詳  
卷之十一  
四十五

童底津少童從祀神功皇后欽○欽日本紀曰先師說稱四座者  
神功皇后坐別殿欽○撰凡土記曰稱住吉者昔氣長足比賣天  
皇母住吉大神現出而巡行天下覓可住國時到沼名掠之長國  
之前前者全神宮南邊是此地乃謂斯實可住之國遂讚祚之云真住吉國乃是定  
神社云此神四月卯日  
出現也仍用卯日乎  
**卯杖**江次第曰上古有出御南殿皇太子參上儀近代不行春宮被  
獻卯杖其木榎榎三束木瓜三束比々良木三束牟保已三束黑  
木三束桃木三束梅木三束椿三束云○公事根源曰卯杖は  
持統天皇三年正月の卯日大學寮より是と有り申日本紀より  
又仁壽二年正月小治浦府後杖と献して榎魁と云ふこと云々  
是と有り是と有り拂ふらり作物所より是と有り以造物ありと  
其上に雲布れ中少治生亂乃方の献と云ふて卯杖ありと

○浮舟卷卯杖注卯槌卯杖日一掌はく多中れ魁也述  
之光院殿説く又ち在卯杖をその坂よりいふ掌わりをを乃  
坂ら心願よりは杉竹より其間と有り事あり  
卯杖はく在宮内庭よりをを其坂と云ふ賦に貫之  
漢宮儀云正月卯日以桃枝作剛卯杖壓鬼○漢書王莽傳云正  
月剛卯金刃之利注服虔曰剛卯以正月卯日作佩之長三寸廣  
一寸四方或用玉或用金或用桃著草帶佩之○雜詠抄云今  
ノ世ニ加茂ヨリ卯杖トテ在家ナリニオクルハ一尺余ノ白  
削タル木ニ日蔭カワラヲ纏テ俱  
利伽羅童ノ形ニ作レル物ト云  
**二宮大饗**日本紀曰  
天武天皇  
朱鳥元年春正月壬寅朔戊午宴後宮○日本後紀曰淳和天皇  
天長七年正月群臣拜皇后賜被又賀皇太子云○公事根源曰

正月二日王卿以下二宮より参りて侍礼わりて食ふは、幸ありて  
 二宮より東宮中宮の少事と云。○小右記曰長和二年正月甲  
 午九大臣以下秉燭参内暫候雲上。次参中宮香舎九大臣以下  
 著中宮大饗外其儀如例初献九大臣外大夫道綱奥一献了  
 餽飶次第云居飯下箸後一巡了給禄九大臣以下侍従等次著  
 東宮大饗東廊初献九大臣傳右大臣其作法如中宮諸卿已下  
 給禄了退出参  
**朝親行幸**  
 先代舊事本紀曰正月二日天皇  
 入卿相名畧之  
 幸朝太后宮天皇於南門下秉自  
 門至階敷第結三重唯天皇幸結上諸卿之結下天皇步也地尊  
 親母也先太后奉褥次天皇奉褥居又孝順之礼也奉饗三献已  
 辞謝云○周礼春官曰大宗伯春見曰朝夏見曰宗秋見曰覲冬  
 見曰遇時見曰會殷見曰同此六礼者以諸侯見王為大云○公

事根源曰也天子より先小上皇并母后の宮より幸かろり  
 わり嵯峨天皇大同四年八月より朝親の儀へし嘉祥二年正月  
 廿日仁明の御門乃母后の朝親の儀へし冷泉院より参り侍  
 南宮より参りて参りて跪行ひ参りて周礼了  
 春日小朝一秋日朝親の儀へし参りて朝親の儀へし云○史記  
 高祖本紀六年高祖五日一朝太公如家人父子禮太公家令説  
 太公曰天無二日土無二王今高祖雖子人主也太公雖父人臣  
 也奈何令人主拜人臣如此則威重不行後高祖朝太公擁篲迎  
 門却行高祖大驚下扶太公太公曰帝人主也奈何以我乱天下  
 法於是高祖乃尊太公為太上皇心善家令言賜金五百斤云  
**臨時客**  
 年中行事歌合正月二日臨時客より参りて周礼了  
 是れ始大臣以下の上皇より参りて周礼了

さし満ちる公指にわゆる修飾宮にゆかり大方大臣母屋乃  
 大饗、年々一々行ゆりて、修飾宮にゆかり、大饗、年々一々、行ゆりて、その真の事、〇  
 中右記裏書臨時客者尊客引諸卿列立南庭殿上人家主降立、御  
 前二拜了、主客座定荷徳大臣被參、殿上人著庇坐先居尊者饌陪膳  
 位供五位三人料敷高杯三本、次居主人饌、次一献四位主人勸盃  
 殿上人座勸盃五位、次二献勸盃殿上人座、次居尊者、飯汁高  
 器海雲汁假、次居納言以下、飯汁一折、次居殿上人汁、次三献公卿  
 勸盃參議、次殿上人坐、次汁物雜羹、次催馬樂朗詠或肩脫、次  
 四献公卿勸盃、中納言、次殿上人座、位、次菓子、次五献公卿勸盃  
 中納言、次殿上人座、四位、次薯蕷粥、次引出物云、公事根源年中行支  
 其趣同、  
 江次第曰、第三日三献供畢、次典藥寮供御膏菜  
 次供御匙盛千瘡膏、於金銅小器、居中盤供之付、  
 多やく

於藥女官女官付頭頭傳陪膳陪膳供之主上取之以右手、無名  
 指令塗於九掌給云、注云、曲右第四指是藥師印相也、〇、後醍醐  
 抄傳御額并耳裏云、御夕ウヤリ御膏藥ト書カウ藥、  
 名ヲ忌テ夕ウ藥ト号也、千瘡膏一名千瘡万病膏、  
 履新

之慶ケイ 履端之慶同意、〇、九傳曰、先王之正時也、履端于始、舉  
 正於中、歸餘於終、云、〇、唐礼樂志曰、皇帝受群臣朝賀、  
 曰元正、首祚景福、維新惟陛下與天同體、臣等謹上千秋万歲制、  
 答曰履新之慶、與卿等同之、云、履端ハ端ヲム也、〇、ラ玉リ行  
 年ノ端ヲフマヘテ賀スル心也、〇、フマハルハ領スル心也、履新  
 モ同シ意ニテ改年ノ御慶トイフト同シト季吟モイヘリ

叙位 日本紀曰、推古天皇十一年冬十二月戊辰朔壬申、皇  
 太子聰請于天皇始行冠位、大德位、小德、大仁、位、小仁







採聚七樣之菜果為羹，號七寶羹。○雜談抄云：公事根源等ノ諸抄七日ハ七種ノ若菜トアリ十五日ニ七種ノ粥ヲ献スル由之。資隆卿ハ條院ハ書進スル簾中抄又同或云七種ハ七日ノ粥ノ事ニテ侍ル七種ノ粥ハ十五日ノ故實也。則七寶羹ノ義ナルヘシ菜果ノ菓ノ義十五日ニ有ヨシ見夕リト云。○大作家訓曰七種ノ若菜ヲ調テ代神并所ノ三寶次ニ父母ニ献ノ後ニ食スレハ春ノ氣病甚ノ疫病秋ノ痢病冬ノ黃病モヤニス又人ニ七魂ト云ハ天ニ七曜ト現シ地ニハ七草トナリ是ヲ取テ食スレハ我魂ノ氣カラ増命ヲ延云。○世說故事云七種菜事諸子ノ考未見梅事文類聚ニ歲時記ヲ引曰正月七日多鬼車鳥渡家々槌門歩戸滅燈燭禳之以俵倍七種ヲ打唱ニ唐土鳥日本鳥度ヲ又先ニト云ハ此鬼車鳥ヲ忌意ナリ

板ヲ打鳴スハ鬼車鳥不止ヤウニ禳也。事文類聚大平廣記云：鶴鷓即鷓也一名姑獲一名夜遊女又名鬼車。春夏之交稍遇陰晦則毛鳴而過嶺外尤多。人家錄人魂氣或云常滴血滴血家則有凶咎云。○紀事云：以今朝之菜粥謂福瀨。四日亦謂福瀨亦煮若水謂福瀨何不知其正也。○齋本州時珍曰：齋生濟々故謂之齋。家取其莖作挑燈杖可辟蚊蚋謂之護生草云。能護眾生也。有大小數種小齋葉花莖扁味美大齋科葉皆大味不及並以冬至後生苗二三月起莖五六寸間細白花。詩曰誰謂荼苦其甘如齋是也。和名ナワナト云。秋冬ヨリ春アリテ甚ナシ故其ナキノ下略也。○藜藿本州時珍曰：此草莖蔓甚繁中有一縷故名。俗呼鷓兒腸菜象形也。易於滋長故曰藜草。古樂府云：為樂當及時。何能待來滋。滋乃草名即是也。正月生苗葉大指頭細莖引蔓

斷之中空也有一縷如絲作蔬其脆也三月以後漸老用細辨白花結小實云倭名三草古歌アリ○芥本州時珍曰芥當作薺从中勤諧声也後省作芥云○呂氏春秋曰菜之美者有雲夢之芥雲夢楚地有勤別勤懸○示雅翼云地多產芥故字从介芥有二種水芥生江湖波澤之涯旱芥生平地二月生苗其葉對節而生其莖有節較而中空五月開細白花云詩云霽沸檻泉言采其芥云此草冬月アリ倭倍嚴寒ノ間尤賞馭ス和名セリ其姓一所ニセニリ合也セニリノ中畧也異名根白草又ツミマシ草又正ノ氏云○菘本草時珍曰按陸佃埤雅云菘性凌冬晚凋四時常見有松之操故曰菘今倍謂之白菜有二種一種莖山厚微青一種莖扁薄而白其葉皆淡青白色八月以後種之二月開黃花云是蔓菁之類倭倍稱之曰菜在水田稱水菜又浮菜在圃稱

菘菜於諸國稱京菜又在水田曰菘生圃曰菁云今スハナトハ小菜ニテ少キ心氏云○鼠麴草本草佛母草和名母子草出文德實錄曰田野有ヤ倍名母子草二月始生莖葉白脆云○蘿蔔韓保昇蜀本草云菜服倍名蘿蔔按尔雅云突蘆肥孫炎注曰紫花菘也倍呼濕菘似蕪菁大根倍名雹突本草時珍曰王禛農書曰北人蘿蔔一種四名春日破地錐夏曰復生秋曰蘿蔔冬曰土酥謂其潔白如酥也珍按菘乃菜名因耐冬如松柏菜服乃根名云是和ニ大根ト稱スル物七種ニハス、シロト云ス、ノ詞ス、ハ菜同意小心ナリシロトハ根ノ白キヲ云須和名ニ濕菘ヲ古保祢ト訓ス是大小根ナリス、ノ詞ニ叶ヘルニヤ○佛座本州時珍曰黃山菜其花黃其氣如瓜故名二月生苗田野偏有小科如薺三四五月開黃花花与莖葉並同地丁但差小耳云臭蒿

一名土器菜又名田平子是尋常ノ七種ノ

若菜ト云又公事根源ハ十二種アリ畧ス

**蓴菜摘** 萬葉集惠

貝ト書リ○為君山田之澤尔惠具採跡雪消之水尔裳裙所沾

藻塩草芥の及名からよいふとるのヨクとるつらも

又云女萎とわきて名ごころなり日事花すうにさく葉れちさになん

俊頼仲実のそとく ともみわきり小しゆり名これとてつらふた

もその名をとり 記さしゆり葉れつらりていしちやそのわさゆ

う○竹方とせれ池つにむり頭昭云名ごころ女萎と書て名ごとよ

名りくともせ日事或は芥とつらふたわしる六指ハ芥れかみかふ

名くよわけり云○本草集解蕪菘日女萎似白斂蔓生花白子

細判裏之間名為女萎亦 **芥蒿摘 磯菜摘** 藻塩草これ

名蔓楚用由不用根云

これともなりつらり又とるぬりわり花芽とかくし日事 春日野ハ

よふけをわすれこのちとるゆりふらん ○夫木りかたて書る乃

ねまつとるをわすれこのちとるゆりふらん 信實○順和名日食経芥菜一

名我蒿和名於八木雀禹食経云状似芥草而香作羹食之○詩

小雅日菁々者我陸機注即我蒿也○本州時珍曰蘆蒿一名我

蒿似小薊宿根生先於百草云 萬葉 春日野介烟立所見城孀等

四春野之菟芽子採而煮良思毛○磯菜ハ重垣云成をれふし

若菜のむりつらり 新 古ふらふやいふつひんいさるやいし 此浦の浦と乃

し女子 俊成 若菜十二種ノ内水雲 **白馬節會** 續日本紀曰

アリ海藻ノ類モ磯菜ナランカ 光仁天皇室

龜六年卯春正月七日天皇御楊梅院安殿設宴於五位以上既

而内既宴進青御馬兵部省進五位以上装馬○文德實録曰

仁壽二年正月甲戌辛豊楽院以覽青馬助陽氣也賜宴群臣○  
 江次第曰九右大將下殿立巽角壇上馬允奏奏文史生持硯大  
 將先取之奏覽之允取硯候大將加署後取文侍從押杖鳥口  
 參上付内侍退著本坐件奏留御馬本必二十一匹也每年九  
 右寮各十足進之其殘一馬稱之餘馬隔年兩寮互進之裏書曰禮記  
 足然而用二十一足者三七之義也  
 三陽之義七日義之由見寬平御記次白馬七足次左右允次白馬七足次九  
 右屬次白馬七足次左右助次右白馬陣渡畢次白馬經殿上前  
 無名門明義仙華門度御前自瀧口此門御殿  
 一皇御簾雖御物忌猶度次分  
 參三宮東宮齋院等次供御膳臣下應之三獻  
 俄式等元且同三獻内教坊別當奏舞  
 妓奏舟内侍奏之件奏留  
 所所別當復坐樂人等於射場殿發音樂舞五  
 曲云○世該回答曰十節記曰白ると馬の性なり中ノ天ノ白龍  
 わり地ノ白ると又天の用ハ龍なり地乃用ハ龍と云ハ之わり又礼

記曰春ノ東郊ホヒノともる七止よりわたり又其ハ其の  
 色ハ白く白きものハ青ちて見ゆも此ハ其ともるもハ其ハ其  
 ○公事根源曰正月七日にもる城をれハ年中此氣とのぞくも  
 本之のりハ明の御門承和元年正月豊楽院よりしりともる  
 以んども云凡元日七日十六日  
 是謂三節会然ハ七日為大節也  
**菜摘川神事** 神社啓蒙  
 云勝手神  
 社在大和国吉野郡吉野川所祭神一座受鬘命其祖  
 未考六十四神  
 式云天孫降臨之時三十二神相湊而奉天降也次為護国後見  
 被下之此二神云受鬘命勝手大明神也即此神之祭祠也每  
 年正月七日此社ノ神人氏ノ男女此川辺ニ至リ若菜ヲ摘勝  
 手御前ノ神供ニ備祭祀ヲナス故菜摘川ト云○今式云此神  
 供ニ用ル器ヲ吉野鉢ト云云○吉野山吉水院云勝手明神ニ

大宮本地毘沙門天禰若宮本地文殊赤右社頭ハ役行者建立  
出現ハ人皇六代孝安天皇六年甲子ト旧記ニ載之又神功后  
宮御建立ノ説アリ正月廿三日神事能有之三月十一日九月  
十九日而度祭礼アリテ神輿本堂へ渡御其外修正会ハ講等  
有之トイヘ氏今菜摘川神事ト云フ不分明菜摘川ハ吉野ヨ  
リ行程一里余菜摘村ニアリ此所氏神ヲ花籠明神ト云小社  
ナリ何ノ神ト云フヲ不知南朝ノ頃ハ六月被行玉フト  
イヘ氏今其取モ絶尤菜摘川吉野山ニ属セヌ勝手祭不審云  
**箕面富**  
 紀事云正月七日今夜諸人競来堂上突富筒其法  
 天女前置大櫃三箇称第一第二第三也其蓋上開  
 小穴今夕寺僧積置数千枚木札參請人使寺僧記名於札上  
 而自穴入櫃内或入一札及三札共入三箇櫃各納了大運轉而

後寺僧以長錐自穴突之数千枚中札無已名者不取之然則得  
富如札之次第云○横州豊嶋郡箕面山瀧安寺縁起云當山役  
小角ノ用基白雉元年ノ草創也小角或時金剛山ニ住シ化他  
ノ悲願ニ身ヲ抛テ密教求法ニ志ヲ勵ム或時乾ノ方ニ當テ  
一ノ異光有行者希有ノ思ヲナシテ心中ニ誓ラク若我所求  
ノ靈地アラハ其地ニ落留ルヘシト一ノ三鉢ヲ投玉フ此鉢  
雲ニ乗ノ當山瀧並ノ松ニカレリ行者此地ヲ尋来レハ老  
翁忽然ト現シテ告テ曰此瀧屈ニ入ラハ求法心ニ叶ヘシト  
テ去又教ニ任テ龍宮城ニ入龍樹井ニ謁シ深秘ノ大法两部  
皆会悉ク授玉フ今来ル瀧地是我淨土也辨才天擁護シ給  
彼瀧ノ辺ニ天女ノ像ヲ安置シ奉ハ扶桑ノ佛法退轉アラシ  
ト云仍テ尊天ヲ彫刻伽藍建立ノ地ナリ今所々富效之ニ

### 御齋會

公事根源曰乞大極殿（イ）八日（イ）十四（イ）十七日（イ）の万歳勝王經（イ）を講（イ）むる朝家（イ）を行（イ）つる此

經（イ）より（イ）公事根源（イ）の功徳（イ）わらふるて荒玉（イ）の始（イ）りて  
光明經（イ）于宮中（イ）儀（イ）式（イ）具（イ）略（イ）云（イ）講（イ）讀（イ）師（イ）參（イ）上（イ）衆（イ）生（イ）座（イ）定（イ）了（イ）雅（イ）樂（イ）著  
座（イ）唐（イ）樂（イ）卿（イ）東（イ）拍（イ）樂（イ）卿（イ）西（イ）法（イ）用（イ）唄（イ）散（イ）花（イ）梵（イ）音（イ）錫（イ）杖（イ）說（イ）法（イ）論（イ）義（イ）分（イ）講（イ）讀（イ）  
師（イ）退（イ）有（イ）執（イ）蓋（イ）執（イ）網（イ）等（イ）云（イ）○拾（イ）芥（イ）抄（イ）曰（イ）大極殿御齋會神護景雲四  
年（イ）戊（イ）午（イ）始（イ）之（イ）有（イ）行（イ）幸（イ）與（イ）福（イ）寺（イ）維（イ）摩（イ）會（イ）某（イ）師（イ）寺（イ）寂（イ）勝（イ）會（イ）己（イ）上（イ）三（イ）會（イ）以（イ）  
法（イ）相（イ）宗（イ）為（イ）講（イ）師（イ）○元（イ）亨（イ）叙（イ）書（イ）曰（イ）叙（イ）道（イ）慈（イ）天（イ）平（イ）九（イ）年（イ）冬（イ）十（イ）月（イ）啓（イ）最（イ）勝  
會（イ）於（イ）宮（イ）中（イ）云（イ）同（イ）曰（イ）叙（イ）源（イ）泉（イ）播（イ）州（イ）人（イ）也（イ）長（イ）久（イ）四（イ）年（イ）為（イ）寂（イ）勝（イ）講（イ）師（イ）至（イ）四  
天王（イ）品（イ）四（イ）王（イ）現（イ）形（イ）唯（イ）帝（イ）獨（イ）見（イ）餘（イ）不（イ）見（イ）尔（イ）來（イ）寂（イ）勝（イ）講（イ）場（イ）設（イ）四（イ）天（イ）座（イ）執（イ）  
為（イ）永（イ）式（イ）天（イ）喜（イ）元（イ）年（イ）為（イ）延（イ）曆（イ）寺（イ）座（イ）主（イ）然（イ）則（イ）講（イ）師（イ）不（イ）限（イ）法（イ）相（イ）于（イ）此（イ）經（イ）一

切經中寂為第一故題云寂勝王是以朝廷建御齋會講論此經  
護持國家乃至諸州住々講說此經以為勝業所謂某師寺寂勝  
會等是

### 真言院御修法 病直人

自正月八日至十  
四日被行之後七

日之御修法是也○續日本紀曰美和元年寂空海奏狀云伏乞  
自今以後一依經法講經七日之時將擇解法僧二十七人沙弥二  
七人別莊嚴一室陣列講尊像莫布供身持誦真言然則顯齊二  
趣契如來之本意現當福聚獲諸尊之悲願云初依請修之永為  
恒例○帝王編年記曰美和元甲寅始置真言院於宮中為鎮護  
國家五穀豐饒每年限一七日被修法云○拾芥抄曰真言院在  
八省北云○公事根源曰云々令別券云々八年昭義券云々  
云々○病直人者漢語抄云晝勤曰直夜務曰病合



而謂止 タイチノハク 大元師法 延喜式云蕃式曰凡大元師法每年正月  
乃伊云 起八日至十四日一七日於省後之 ○公

事根源曰治部省云七日月也乃乃菟人内蔵寮の官人として  
侍夜で始り壇前小たくら侍夜が入維のつかれと云成ゆら侍  
而より後ハ菟人封として也と云云○元亨叙書曰叙常曉  
後朝の月ハ侍夜云々云々也云云○元亨叙書曰叙常曉  
義和元年甲寅入唐謁花林寺三教講誦大德元照受大元師秘法  
此法彼國不出都 照喜境之器才潜授焉明年帰申官於小栗  
栖故里法琳寺修元師法斎衡之間天下大旱勅於神仙死修大  
元法白竜現幡上大雨普灑云々曉公山州小栗栖路傍棄子也稍  
長師事元奥寺豊安貞觀七年十一月晦日逝○雜談抄云斎衡  
文德帝之御宇五十五代ニ當ル大元法爰ニ始ルニヤト云

古書集